

令和2年度
静岡県立大学短期大学部

F D 委員会報告

I 令和2年度FD委員会活動について

令和2年度FD活動の基本方針

FD事業本来の目的に立ち返るといふ基本方針のもと、PDCAの手法を視野に入れてFD活動の全面的なチェックを行いつつ継続的な事業の実施を行った。また、コロナ禍という状況下にあった令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止に向けた静岡県立大学の活動指針に沿った内容となるよう、事業計画を策定し実施した。

基本方針に従って実施した事業は以下のとおり。

- ・遠隔授業に向けた取り組み
- ・遠隔授業に関するアンケートの実施
- ・FD講演会
- ・授業評価アンケート
- ・FD資料展示
- ・「FD活動報告書」の編集発行・公開
- ・委員会開催

以下にその詳細を報告する。

1. 遠隔授業に向けた取り組み

新型コロナウイルス感染症対策に伴って遠隔授業を実施するにあたり、教務委員会・FD委員会合同で遠隔授業ワーキンググループを組織し、FD委員会より2名の委員が構成員となった。

遠隔授業ワーキンググループでは、以下の3点を作成し、遠隔授業実施可能性の検討及びマニュアルの作成等を行った。

- (1) 「遠隔授業の形態と方法(案)」(教務委員会・FD委員会)
- (2) FD委員会として「新型コロナウイルス感染症対策としての遠隔授業に関するガイドライン(教員向け)(案)」(FD委員会)
- (3) 「新型コロナウイルス感染症対策としての遠隔授業受講についての注意事項(学生向け)(案)」(教務委員会)

2. 遠隔授業に関するアンケートの実施

新型コロナウイルス感染症拡大防止に向けた静岡県立大学の活動指針に沿い、前期は遠隔授業を行ったので、「遠隔授業に関するアンケート」を簡易な形で実施した。結果を専任教員に報告し、各教員が授業改善に取り組めるように働きかけた。

対象：短期大学部学生 299名 有効回答数 253名

実施期間：令和2年7月18日～7月22日

実施方法：Googleフォームのアンケートをユニパで掲示登録

3. FD 講演会

- ・第1回短期大学部FD講演会

日時：令和2年10月29日（木）17：15～18：45

実施形態：Zoomによるライブ配信およびオンデマンド

講師：東京医科歯科大学副理事（情報・IR担当） 木下淳博教授

演題：「遠隔授業におけるICT活用教育の実践と著作権」

参加者：28名

新型コロナウイルス感染症への対応として、遠隔授業を実施する教員が多いため、ICT活用教育の実践と著作権に関して新たな手法や知識を得ることができた。

- ・第2回短期大学部FD講演会（全学FD委員会・健康支援センター共催）

日時：令和2年12月7日（月）～12月13日（日）

実施形態：学内情報ポータルサイトを使用しての動画視聴

講師：浜松医科大学医学部精神医学講座准教授 桑原斉先生

演題：「発達障害のある学生の理解と支援」

参加者：38名

ここ数年、障害学生支援についての講演を開催し、教員の関心が高いことから、本年度も障害学生支援についての講演会を開催した。今回の内容から得られた知識は、学生支援の際に、あらかじめ理解してスムーズな対応として活用できそうなものであり、有意義な講演会となった。

4. 授業評価アンケート

昨年度まで用いていた項目は10年ほど変更せずに使用されていたが、内容の見直しを行い、シラバスに関連する項目、遠隔授業に関する項目を加えて実施した。実施方法は、従来のマークシート方式に代えて、ユニバーサルパスポートを経由してオンライン方式として、後期のみ実施した。

5. FD資料展示

小鹿図書館と共催で、FD資料展示コーナーを設置した。近年刊行されたFD関連書籍の中から、委員会で展示書籍を選定して3月に実施した。

6. 「FD活動報告書」の編集発行・公開

昨年度と同様、授業アンケートの集計が納入されてから、下記の内容で報告書を作成することを決定した。これまでどおり、①紙（冊子）②DVD（CD-R）③WEBの3種の媒体を作成する。

- ・授業評価に対するフィードバック
- ・授業評価アンケートの現状と課題

- ・各種事業の実績報告

本委員会報告書は、授業評価アンケートへのフィードバックを含むため、翌年度に前年度委員が作成・公開している。

7. 委員会開催回数

7回

II 学生による授業評価アンケートの実施方法および教員のコメント

1. アンケートの実施および教員にコメントの作成について

1. 1. 授業評価アンケートの実施方法・内容

学生による授業評価アンケートの実施方法は、新型コロナウイルス感染症による遠隔授業実施を踏まえて、後期のみユニバーサルパスポートを経由してオンライン方式で実施した。授業評価アンケートの内容は、平成 23 年以降変更していなかったものを、見直しを行い新たな内容で実施した。

実施方法は次の通りである。

- ① アンケートの実施時期は、早期終了科目は授業第 8 週より、15 回実施科目は授業第 14 週より回答開始とし、回答期限を後期集中講義/補講/試験期間の最終日とした。
- ② 授業担当教員が授業ごと、学生に入力を指示した。
- ③ ユニバーサルパスポート経由で回答されたデータは学生室がダウンロードする。
- ④ 学生室は質問項目ごとの集計及び自由記述欄の転載を外部業者に委託する。
- ⑤ 業者から納品された④の教員個々のアンケート集計と自由記述を転載したものを封筒に入れ、FD委員会から各教員へ配布し、「教員によるコメント」の執筆を求める。
- ⑥ 上記①～⑤は、本学専任教員および非常勤講師の担当科目をアンケートの実施対象とする。但し、現段階では非常勤講師の場合は、協力依頼とする。
- ⑦ 担当科目のうち、回答者が 5 名以下の場合は、集計を行わない。
- ⑧ システム上、授業科目ごとの評価となるため、担当教員 2 名以上で担当している科目は、履修科目一覧表の 1 番目に名前が記載されている教員に結果を渡す。
- ⑨ 1. 2. 授業評価アンケート用紙

本年度、アンケート項目の見直しを行い、3 つの大項目を設定し、「あなた自身の取り組みについて」(7 項目)、「授業について」(13 項目)、「遠隔授業の方法について」(3 項目)、計 23 の質問項目を設定した。各質問ともに「そう思う」、「ややそう思う」、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」までの 5 段階によって行なわれる。自由記述欄は、「この授業でよかったと思うこと」、「この授業で改善が必要だと思うこと」と、アンケート項目だけでは表現しきれない当該授業に対する学生のコメントを具体的に述べられる内容となっている。

授業評価アンケートで使用した質問項目

あなた自身について	1	自分は、授業を受けるにあたりシラバスを読んだ。
	2	自分は、この授業に欠席や遅刻をしないように努めた。
	3	自分は、この授業を意欲的な態度で受講した。
	4	自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した。
	5	自分は、予習復習（提出課題を除き）をして理解を深める努力をした。
	6	この授業の内容は良く理解できた。
	7	自分は、この授業を受けて、この分野に対する興味、関心が増した。
授業について	8	シラバスに授業の目的、授業の到達目標、授業の計画と内容、評価の方法が明示されていた。
	9	授業の目的と到達目標から見て、授業の難易度は適切であった。
	10	授業は、シラバスに沿った授業の計画と内容で展開されていた。
	11	毎回の授業の量と範囲は適切であった。
	12	教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた。
	13	教員は、学生の理解が深まるように授業方法を工夫していた。（説明の仕方、授業形態、配付資料、板書、情報機器の活用など）
	14	教員は、学生が主体的に学びに取り組めるよう工夫をしていた。
	15	教員から与えられた課題（宿題、レポート）は、質・量ともに適切であった。
	16	教員に授業に対する熱意が感じられた。
	17	教員は、学生に対して誠実に対応していた。（質問への対応、レポートへのコメントなど）
	18	成績評価の方法は適切であった。
	19	この授業は、新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった。
	20	安全についての指導や配慮が十分なされていた。（実習科目のみ回答）
No.21～23は遠隔授業が行われた科目について回答してください。		
遠隔授業について	21	遠隔授業の方法は、授業内容の理解の上で適切だった。
	22	遠隔授業は、学生が興味を持って取り組めるよう工夫がされていた。
	23	遠隔授業での課題は、学生が主体的に学べるように配慮されていた。
その他の意見		
・この授業で良かったと思うこと		
・この授業で改善が必要だと思うこと		

1. 3. 教員によるコメント作成方法

教員はアンケート結果を踏まえて、「教員によるコメント」を作成する。

その他の作成方法も含め、実施要領を作成し非常勤を含め全教員に配信した。

1. 4. 公表の目的と方法

上記は「教員によるコメント」として『令和2年度FD委員会報告』に記載し本学 web 上に公表する。

公表の主要な目的は、教育の根幹である授業が広い公共性を持つこと、およびその費用の大半を県費で賄っていること、この点に起因する公開責任と説明責任からである。本学で今年度行なわれた授業についての学生の評価に対して、教員がどのようにそれを受け止めて改善しようとしているかを報告書として可能な限り公表し、本学に課せられた社会的な責任の一端を果たそうとするものである。

2. 教員によるコメント

以下に、アンケート結果に対する教員によるコメントを載せる。掲載順は以下の通りである。

i) 専任教員

①一般教育等、②歯科衛生学科、③社会福祉学科社会福祉専攻、④社会福祉学科介護福祉専攻、⑤こども学科（学科等、専攻の中は職位順、職位の中は五十音順）

ii) 非常勤講師（五十音順）

学科・専攻：一般教育等 職名：教授 氏名：鶴橋俊宏
対象科目：言語と表現（講義）

ことばそのものの性質を理解することは、人間の思考およびコミュニケーションと、言語との関係を理解するのに必須な知識である。「表現」という語を用いていることから、「日本語表現法」のようなものをイメージされている嫌いはあるが、技法ではなく言語そのものに対する深い理解を醸成する科目である。その故に「言語と表現」は「人間理解」に置かれている。

ここ数年は、「定義」「分析」の二つをキーワードに展開している。これらは論理的な思考の基礎であるが、正確に把握されているとは言えない。またそもそもことばによる論理とは何か、学問的知見に基づいて考える機会は多くない。単なる辞書的意味の解説ではなく、語義の構造・仕組み、ことばによる論理とはいかなることなのかを説く中で扱っている。

日本語を対象とした言語の学は、時に「国語科」と混同されることがある。もちろん、無関係ではないが、言語の本質を考究することを目的とし、言語を客観的に観察・説明しようとする点で異なる、未修の分野である。そのため、独自にテキストを編み、全ての学生が同じスタート・ラインに立てるように工夫している。医療福祉系の学生にとって扱う対象がかなり抽象的と思われるので、実生活に即した例を取り上げるよう努力している。人間の精神活動の重要な部分であるので、各自の生活に即した方向で理解を深めてもらうよう講義を行うように心がけている。これが奏功し受講生諸君は意欲的に授業に参加してくれたと思う。常に訴えていることであるが、ことばの運用能力はフィジカル・トレーニングに似ている。学生諸君には、授業外でも教員の専門知識・知見を活用すべく機会をとらえてほしいと思う。

学科・専攻:一般教育等 職名:教授 氏名:林恵嗣

対象科目:体育実技(実技)、健康科学論(講義)

【体育実技】

令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、履修者数が25名以上の場合、2組に分けて実施した。一方が対面授業を実施する場合、もう一方を遠隔授業として実施し、翌週は交代して実施した(学生的には、隔週で対面授業となる)。また、対面授業時でも遠隔授業を希望する学生に対しては、遠隔授業対応とした。遠隔授業では、学生自身で運動内容を考えることとした。これは、学生毎に体力水準、運動内容に対する好み、自宅周辺の運動環境等が異なるためである。

学生自身で対面授業か遠隔授業かを選択できるようにした点については、評価されたと思う。しかし、遠隔授業においては、学生自身で運動内容を考えなくてはならない点が難しかったかもしれない。また、この点については、説明不足であったと感じる。この点が、授業評価が低くなった原因と考えている。令和3年度において、遠隔授業を実施する場合には、しっかりと説明を行いたいと思う。

学生へ期待することとしては、疑問があった場合には、質問をしてもらいたい。遠隔授業の課題提出の際には、相互にコメントのやり取りができるシステムになっているので、そういった機能も利用してほしい。

【健康科学論】

令和2年度は、対面授業と遠隔授業のどちらでも受講できるように授業資料を作成して授業を実施した。歯科衛生学科では授業評価が高かったが、これは選択科目であることから、これまでと同様に履修人数が少ないものの授業内容に興味を持っている学生が履修していたためと考えられる。

対面授業と遠隔授業では、同じ授業資料を用いたため、対面授業時においては、文字が多くなりすぎるという点が改善点と考えている。令和2年度においては、今までとは異なる形態での対面授業を実施したため、今後もこの形が継続される場合には、授業資料や授業の進め方を考える必要があると考えている。

自由記述において、対面授業と遠隔授業での評価方法が異なるというコメントが書かれていたが、成績評価については、履修要項に記載している通り試験結果のみから判断しているので、成績の評価方法は対面授業と遠隔授業では同じである。

学生へ期待することとしては、授業内容が分からなかった場合には、まずはしっかりと復習をしてほしい。また、遠慮なく質問をしてほしい。

学科：一般教育等 職名：講師 氏名：有元志保
対象科目：英語（演習）

本科目では、VOA のニュース映像と、それに関連した文章を通じてアメリカの文化や社会について学ぶ教材を使用した。基礎的な英語力の向上とともに、異文化に対する理解と関心を深め、広い視野を身につけることを目指した。

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、授業の大部分を遠隔形式で行うこととなった。状況の変化に対応する必要等から、年度の途中にも授業方法や内容にさまざまな変更を加えることとなり、受講者には度々負担をかけた。受講者の理解と協力に感謝したい。

授業では LMS を活用した。受講者にはまず、テキストの文章やニュース映像を各自で読解、視聴してもらい、その後、授業資料を参照しつつ、内容理解を確認する課題に取り組んでもらった。課題は採点の上、コメントを付して返却し、授業後には文章や映像の日本語訳等を公開した。

双方向性を確保するため、毎回の課題には感想・質問欄を設け、受講者の疑問や不明点が解消するよう、丁寧なフィードバックを行うことを心がけた。こうしたやり取りは、教員にとって受講者一人一人の理解度や、全体の傾向を把握する一助となり、受講者からは意欲的な学習につながるという意見をもらった。また、受講者同士の学び合いの機会となるように、互いの英作文やレポートを読むことができるようにしたことも、受講者に好評であった。当初のシラバスとは異なる点多かったが、課題や授業評価アンケートの結果からは、概ね授業目標を達成したと判断できる。遠隔授業で得た知見を今後の授業運営に役立てていきたい。

学科：一般教育等 職名：講師 氏名：有元志保
対象科目：応用英語（演習）

本科目では、NHKの『COOL JAPAN：発掘！カッコいいニッポン』を題材とする教材を使用した。英語運用能力の向上を図りつつ、日本文化を再認識し、世界の多様な文化について理解を深めることを目的とした。

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、授業の大部分を遠隔形式で行うこととなった。年度の途中にも授業方法や内容にさまざまな変更を加えることとなり、受講者には度々負担をかけた。受講者の理解と協力に感謝したい。

授業ではLMSを活用した。受講者にはテキストの文章や映像を各自で読解、視聴してもらい、その後、授業資料を参照しつつ、内容理解を確認する課題に取り組んでもらった。課題は採点の上、コメントを付して返却し、授業後には文章や映像の日本語訳等を公開した。

LMSを使用する都合上、スピーキングのグループワーク等を実施できなかった代わりに、例年は十分に時間を割くことの難しかったライティングに集中的に取り組んでもらうことができた。ライティングの添削に加え、毎回の課題には感想・質問欄を設け、受講者の疑問や不明点が解消するよう、丁寧なフィードバックを行うことを心がけた。また、受講者同士の学び合いの機会となるよう、ライティングを授業資料に掲載し、互いに読めるようにした。こうした試みは、受講者から好評を得られた。

当初のシラバスとは異なる点も多かったが、課題や授業評価アンケートの結果からは、概ね授業目標を達成したと判断できる。今後、授業形式にかかわらず、遠隔授業で得た技術や知識を授業づくりに活かしていきたい。

学科・専攻：一般教育等 職名：講師 氏名：上田一紀

対象科目：情報と生活（講義）、現代社会学（講義）

[情報と生活]

本科目は、情報機器（PC やスマートフォン）やネットワークシステムの基本的な仕組みや特徴を理解すること、情報セキュリティや情報倫理を考える際の基本的な枠組みを理解すること、情報の法（情報法、メディア法）の基本を理解すること、を目的としている。

[現代社会学]

本科目は、社会的な考え方を身に付けること、社会学の基礎知識・代表的な理論を理解すること、社会的思考を日常の出来事や現象に適用できるようになること、を目的としている。

2020 年度後期は、両科目ともにオンライン（オンデマンド型）で実施した。配信する講義動画については、画面キャプチャソフトウェアを用いて、講義資料や PPT のスライド等を見せながら担任者が解説・説明を行うという形式で作成した。受講生には、Google スプレッドシートの URL を共有しており、同シートを通して、講義資料・講義動画等を取得・閲覧・視聴可能な状態にして、各自、定められた期間内に受講するようアナウンスした。また、毎回、同シートにある Google フォームから各回の授業内容を振り返るための小テストや課題を行わせ、理解を促すよう心がけた。これらの提出物については、Google フォームのテスト機能を用いてフィードバックしたり、受講生のメールアドレス宛にメールでコメントしたりする等した。講義の進め方について、受講生は、インターネット環境が整っている場所で各自のペースで受講するが、質問等は随時担任者のメールアドレス宛に行うよう指示した。

いずれの科目も、アンケートの全項目で学科・専攻の平均を上回っている。自由記述欄においても受講生からプラスの評価を得ており、これらのコメントを参考しながら今後も教育に取り組みたい。

改善が必要な点については、担任者への質問をしやすいようにしてほしいという回答があった。これについては、同時双方向型遠隔授業システム（Zoom）の利用も取り入れる等して対応したいと考えている。

学科:歯科衛生学科 職名:教授 氏名:有泉祐吾
対象科目:口腔病理学(講義)、歯科材料学実習(実習)

今年度の後期授業は、新型コロナウイルスに対する感染防止の観点から、また本学の新型コロナウイルス感染症拡大防止に向けた活動指針が、『遠隔授業を積極的に推奨』であったため、講義科目は遠隔で、実習科目は対面と遠隔とを組み合わせで行った。具体的には、講義科目である口腔病理学は、何よりも感染防止と学生の利便性を考慮し、同日の他の開講科目の授業形態に影響されないことから、オンデマンド方式の遠隔授業とした。一方、歯科材料学実習は、実習であるので実際の手技を、感染防止を最大限に図りつつ可能な限り実施するために、一緒にご担当頂いた先生方の絶大なるご協力のもと、学生数を半数にして同一内容の実習を2回実施した実習と遠隔での実習に対する課題とした。両科目とも、歯科衛生士教育における専門科目であることから、例年通り講義科目においては、必要最低限の知識を修得させることを、実習科目においては、講義科目における基礎的知識の理解度をさらに深化させることを目標として、今年度もブラッシュアップを行い実施した。特に、実習科目では例年以上に、予習、実習、まとめ(復習)のサイクルを徹底した。その結果を見ると、講義科目においては『オンデマンドであったので、時間的な余裕があり、自分のペースで好きな時に学習できた、また、何度も見直すことができ効果的であった。』等であり、実習科目においては『必ず、レポート課題に次回の予習も含まれていたため、予習を行ったうえで、次の実習に取り組んでいけたので、理解がより深まりやすかった。』等、意図したことを理解、実践してくれたような肯定的な意見が大多数であった。また、両科目とも試験結果は、例年との顕著な差異は見当たらなかった。したがって、遠隔での授業だからといって理解度の点において、必ずしも不利であるとも言えないことが示唆された。

なお、例年以上に学生には受講における不便な点等を聴取し対応した。例えば講義資料も、学務情報システムにアップしただけでは、それをプリントアウトする環境を持たない学生にとっては、非常に大変であるとのことであったので、登校時に配布し、ただでさえ大変であろう学生の負担を少しでも軽減するよう配慮した。本来、このような受講にあたっての配慮は、大学当局が行うことであると考えられたが、ほとんどそのような配慮は行われなかったため、個人的対応を行った。そして、大学当局が前期の対応に関する検証を行った上で後期に向かうものと思っていたが行われず、現在に至るまでに昨年度の対応の検証を全学的に行ったとのことは聞いていない。組織としての検証が行われていないため、今後不幸にも同様な事例が生じた場合、残念ながら、今回の経験は十分には生かされないものとする。これは、ここ数年来指摘している、この授業評価アンケートを現状のような個人対応だけでなく、組織としての対応も必要ではないかということ、また、そもそも実施機関はこれをどのように考えているのかということにも通じるものとする。組織としての検討結果を、また組織としてこのアンケートをどのように有効活用していくのかを、今一度思案すべきとする。

学科：歯科衛生学科 職名：教授 氏名：仲井雪絵
対象科目：【後期のみ】① 口腔衛生学Ⅱ（講義），② 臨床歯科診査法（講義），
③ 救急処置法（講義・教員3名で分担），④ 臨地実習Ⅲ（実習・学科全教員で分担）
※ 2020前期 担当科目授業アンケートなし [小児歯科学，口腔発達学，臨床歯科医学序論，口腔衛生学Ⅰ，臨地実習Ⅰ，臨地実習Ⅱ].

I 授業の目標・工夫

優れた歯科衛生士を輩出するために，日本一の教育方略を目指している．歯科衛生士国家試験の合格は教育の最終ゴールではなく通過点に過ぎない．本年度は COVID-19 の世界的拡大のため，前期は対面授業とオンライン授業（オンデマンド方式）の混合型で講義を実施せざるを得なかった．それまでに経験の無いことであったが，Advance な内容を盛り込み，果敢に挑戦した．しかし上記の後期授業全てに関しては，さらなる学修効果を追求し，感染拡大防止に最大限配慮して対面授業で実施した．

2017年度以降，日本の歯学部における医療面接教育のトップレベルの研究者・教育実践者（医療系大学間共用試験実施評価機構委員）を招聘し，日本で最先端の歯科医療面接および動機づけ面接法の学修機会を実現化している．2020年度も，上記④の中で模擬患者参加型の Motivational Interviewing（動機づけ面接法）を導入した．

臨地実習Ⅲにおける歯科衛生実践実習に関しては，例年のようなマンツーマンのきめ細やかな指導を断念せざるを得なかった．しかし，学修効果を上げ，十分補完できる方法を考え抜いた末に，第1回歯科衛生実践実習発表会を開催するに至った．その先の将来構想も見すえた上での，歯科衛生学科教員全員で取り組んだ教育改革の1つである．

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

学生による授業評価アンケート集計結果を供覧すると，「I あなた自身の取り組みについて（5点満点）」は①4.47，②4.23，④4.52「II 授業について（5点満点）」は①4.71，②4.60，④4.64，「III 遠隔授業の方法について（5点満点）」は①4.77，②3.78，④4.36であった．後期科目は，全て対面方式で実施し，遠隔方式を実施することはなかったため，「III 遠隔授業の方法について」という設問は意味をなさない．にもかかわらず，同アンケート項目に対する回答がなされているのは奇異である．よって，その評点の信頼性・妥当性に疑義を唱えたい．

講義スライドは，毎年アップデートしている．すべての担当科目において各講義回の2週間前までに該当する授業資料を学務システム（UNIVERSAL PASSPORT）にアップロードし，学生の予習に役立つ努力をした．同システムの機能をさらに活用し，課題管理によって双方向性の教育指導に着手した．先述したとおり，模擬患者参加型演習を今後も継続する．

III 学生に期待すること・学生への要望等

学校で教わることが，あなた方の学ぶべき全てではありません．未知なるものに対して謙虚に貪欲に勉強する積極性を失わないでください．自分が一度も見聞したことも使用したことのないものを根拠無く批判するような「食わず嫌い」にはならないでください．また，無批判で全てを受け入れないでください．批判的吟味する判断力を常に忘れず，その上で良いと判断できるものを即受け入れる柔軟性を養っていただくことを期待しています．

学科：歯科衛生学科 職名：教授 氏名：吉田直樹
対象科目：微生物学（講義）、歯周治療学（講義）、歯科衛生統計学（講義）

I 授業の目標・工夫など

歯科衛生学科の学生は、卒業すると、「短期大学士」の学位とともに「歯科衛生士国家試験受験資格」を取得する。

授業においては、全ての学生が国家試験に合格するために必要な知識を確実に伝え、十分に理解させることを、目標としている。要点を示して、簡潔に伝えることを心がけている。しかしながら、講義においては、単に教科書に記載されている知識を与え、学生は、それを得るということに留まらないようにと考えている。いわゆる詰め込み教育となってしまうのは、学生が「自主的に学ぶ」という機会を奪ってしまうことになり、将来、「受け身」の姿勢で学ぶことから抜け出せなくなってしまう恐れがある。学生は卒業後、学問を続けて行くこととなる。

本学に在学している時間よりも卒後の時間の方がはるかに長い。したがって、学生ひとりひとりが、短期大学において「学問をした」という実感を卒業後にも永く持ち続けられるような内容の授業を行いたいと考えている。

日常の授業において、学生ひとりひとりが「自分は学問の場に身をおいている」という実感を持てるようにすることを心がけている。学生自身が「学問」をしているということを感じられること。

つまり、それぞれの科目が、学問としての体系を有していること、先人達の研究によるエビデンスの蓄積が教科書に記載されているということ、そして、それは現時点のものであって、将来的には変化して行く可能性もあるということを理解させるように努めている。授業を理解しやすくする工夫としては、PowerPoint や動画を活用している。また、OHC(Over Head Camera) を用いて、歯科に関する模型や患者説明用の冊子等の現物を、投影して見せるといったことも行っている。さらには、模型等を教室内で「回覧」することもある。学生に配布している紙ベースのレジュメに関しては、重要語句の部分などを空白にして、学生が書き込んで完成する様式を用いることにより、やはり学生の集中力が維持されるように工夫している。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

学生による授業評価アンケートの結果は、良好であったと考えている。

本年度、後期の特徴として、対面授業においては、常に、マスクを着用して講義を行ったため、マスク無しで行っていた時以上に、はっきりと、滑舌良く話す必要があった。それを意識し心掛けたのであるが、少し聞き取りにくいことがあったようである。来年度以降も、マスク着用での講義の際には十分に注意したいと考えている。

学生が、授業を受けた後に、その分野に興味を持てるような授業を展開したい。学生が、その分野に関して自主的に、更に学びたいと思うような授業にしたい。理想としては、学生には難解なものに挑戦させて、自らの力で理解して行こうと努力する時間を十分に与えたい。学生が「自ら考えることによって、理解するというところにたどり着いた。」という喜びを得られる機会を多く持てるような授業にしたいと考える。

Ⅲ 学生に期待すること

穴埋めのプリントを多く作成していることと、矛盾するのではあるが、学生自身が内容をうまくまとめて、自分なりにノートすることができることが望ましいと考える。学生が、自主的に学ぶという方向に持っていきたいと考える。将来、学生が卒業後に学び続けていく中で、自分自身で能動的にノートをとってほしいと希望する。

学生にとって「わかりやすい」授業は良い授業であるのかも知れない。しかしながら、全ての授業が、理解しやすい授業ばかりになってしまうことは、本当に望ましい状況とは言えないかもしれない。

簡単には理解できないものを、何とか理解しようと学生が努力することは重要な知的活動となると思う。社会人になってからは、そのような能力は無くてはならない。学生には、容易にはわからないものに対して、「面白い」、「挑戦してみたい」、と思うような気持ちを持ち続けてほしいと希望している。

学科・専攻：歯科衛生学科 職名：准教授 氏名：長谷由紀子
対象科目：マネジメント論（講義）、学校歯科保健実習（実習）

【授業の工夫】

マネジメント論では、講義と事例に基づいた個人・グループワークを中心に授業を進め、論理的な歯科衛生実践の考え方のトレーニングとなるよう、積極的な参加を促すように工夫して実施した。学校歯科保健実習では、これまでに学んだことを活用し、対象者に合わせた歯科保健行動に関する「ねらい」を達成するための指導方法を学生自身で立案し、実践するための学習支援を行うよう心掛けた。歯科衛生実践の根拠を念頭におき、歯科衛生士の専門性に基づく歯科衛生ケアプロセスや保健指導の立案など論理的な考え方を重視して講義・実習を行った。定期的に学習ファイルを提出してもらい、各学生の学習状況（成果）の把握とフィードバックを行い、個人に合わせた指導が行えるように努めた。

【授業についての自己評価と今後の改善・工夫】

今回、自由記述でいただいた感想から、学生一人一人の学習状況の把握とそれに応じた形式的なフィードバックは引き続き実践していきたいと感じた。今後は、提出された課題や学習ファイルからだけでなく、授業中にもなるべく個々の学生の学習状況を確認、把握し、その場で適切なフィードバックが可能な限りできるように努めていきたい。授業内容の難易度については、基本的なことではあるが伝える能力と状況に応じた指導方法を研鑽していくべきである。授業課題の量については、多すぎても少なすぎても学生の能力が向上につながらないため、随時学生の様子や状況を理解し、量や時期を見極め、適切な学習支援が行えるよう尽力していきたい。

【学生に期待すること】

授業に関して率直なご意見をお願いします。

学科・専攻：歯科衛生学科 職名：准教授 氏名：野口有紀
対象科目：地域歯科保健実習（実習）

I 授業の工夫など

専門分野における知識・技能・態度を取得し、授業の役割の明確化する運営を目標とした。基礎と専門科目、座学と演習・実習などの多方面の授業内容の連携をはかり、実践する能力を修得する組み立てとした。

- ・ 動機付けの工夫として、現場の情報・体験情報・最新の基幹統計や一般統計など調査結果および原著論文を取り入れた理論と実際のマッチングを意識した授業運営を行った。
- ・ 概念理解の形成を助ける工夫として、図・写真・グラフなどを活用した教材を使用した。
- ・ 学習意欲を高める工夫として、理解度・反応がわかるよう授業内でマークシート形式の小テストを行った。小テストは国家試験に準じた形式で行った。答えあわせおよび解説を行い、理解の確認と定着を図った。
- ・ 授業参加を促す工夫として、授業中の理解度を成績評価に反映させた。
- ・ 情報技術活用の理解と工夫として、視覚教材を用いた。
- ・ 問題発見・解決能力を高める工夫として、ケース・メソッド、社会と連携した最新の情報・調査結果を取り入れた授業の実施に努めた。
- ・ 理解度に合わせた指導の工夫として、オフィスアワーを設定し丁寧な対応を心掛けた。
- ・ 成績評価の工夫として、筆記試験のみに偏向しない多面的成績評価をした。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

授業アンケート集計結果の「I あなた自身の取り組みについて」「II 授業について」「III 遠隔授業の方法について」のすべての項目において、学科平均点より高かった。特に、「II 授業について」では概ね 4.70 であり、特に「理解が深まるように授業方法を工夫していた」「学生が主体的に学びに取り組めるような工夫をしていた」「授業に対する熱意が感じられた」は非常に高い平均点であった。工夫した授業の取り組みにより、興味・関心を持ち、理解が深まったと思われる。今後も同様の手法を用い授業展開を図っていく。さらに、学習意欲を高め、理解力が深まるよう、下記について改善・工夫に努めたい。地域歯科保健実習の科目の「教員から与えられた課題は、質・量ともに適切であった」の項目の平均点が、他の項目に比較し低い傾向であった。本年度、課題の質・量の見直しをしたが、さらにスリム化する必要がある。今後も、学習意欲を刺激し、理解しやすい授業運営が出来るよう努めたい。

III 学生に期待すること・学生への要望等

事前学習・事後学習などの課題設定を含め、授業内容をよりよく理解し実践に役立てるよう、能動的な学習ができるようにして欲しい。

学科・専攻：歯科衛生学科 職名：講師 氏名：森野智子

対象科目：歯科衛生倫理（講義）、障害者歯科保健介護論（講義）、歯科診療補助・支援実習Ⅱ（実習）、歯科保健教育法（講義）

I 授業の工夫

コロナ禍においても、例年通り「根拠ある知識を身につけ、論理的な思考力を育み、それを行動に繋げる」学生教育を目指し、多くの内容を盛り込んだ授業を組み立てています。具体的には、1年次の概論科目において、新入生でもわかり易い到達目標を示した教育をしています。2年次の授業においては、旧知の事実から最先端事例に至るまでの数多くの情報を紹介しています。

思考の機会を設け、考えながら手法や技術が定着する学修を目指し、後期の学内実習で総まとめするようデザインしています。常に、根拠を明確にした説明をしつつ、身体や心を動かす機会を持つような授業提供に努めています。また、学生の参加評価が低い傾向がある、「自分（学生）は、疑問点を必要に応じて教員に質問した。」については、授業の終わりに質問時間をとったり、レポートに質問記入欄を設けたりするようにして質問の機会を増やす努力をしています。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

毎年、授業の終わりには必ず質問機会を設けたり、毎回提出してもらうレポートに質問記入欄を設けて、必要に応じ全体や個人向けの回答をしているにもかかわらず、今回も「自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した。」への評価が低く、改善方法がわからず困惑しています。もしかしたら、授業の説明で解決できているのかもしれませんが、さらに学びを深めて頂くために、より深く考えたくなるヒントを伝えるような努力をします。

遠隔授業の際、学生の使用している教科書と自分の物の頁数が異なっていることがありました。内容は同じであっても、毎年学生と同じ教科書を準備して授業する必要があると感じました。

学生自身の意見を述べ、まとめ、考える機会を与えることで意欲的に学修する姿勢が身についたという感想がありました。これからも、大学生として、主体的に学ぶ力を付ける機会を提供するように努めます。

歯科衛生学科の学生は、歯科保健指導に対する興味を持っているものの実際に指導を受けた経験が少ないことから、大学教育においても早期に歯科保健指導の機会を与える必要性を感じました。今後も、学生の日常や背景を理解することで、ニーズにしっかり応えるような教育を行いたいです。

III 学生に期待すること・学生への要望

学生が出席するのが楽しみだと思えるような授業を提供するように努めています。社会人になる前に、大学で学ぶ意味を考えて、能動的に授業に参加してくださることを願います。

学科・専攻：歯科衛生学科 職名：講師 氏名：山本智美

対象科目：歯科予防処置論（講義）、感染予防法（演習）、齲蝕予防処置実習（実習）

I 授業の目標、工夫、自己評価

今年度は前期、遠隔授業を余儀なくされた一方、リモートでの課題提示の機会が学生の理解度の向上に役立ったことを実感した。幸い後期は対面授業を実施することができ、「歯科予防処置論」では歯や口腔の健康の保持増進の考え方、予防方法等について理解することを目標とした。歯科疾患実態調査の結果の推移や関連する最新のデータを提示し、わが国における口腔保健の現状についてグループごとに発表する機会をもった。口腔健康管理について理解を深めるため、感染予防に十分配慮し口腔内でのプラークコントロール（歯垢染色、ブラッシング）の演習を実施し、自身の口腔内を観察する機会を得たことにより口腔衛生について関心が高まったと思われる。ライフステージにおける口腔保健管理については妊産婦期、乳幼児期から老年期まで具体的な事例から問題点の抽出、対応策を検討することにより人々の生活、環境等と歯・口腔の関わりについて関心が高まったと思われる。「感染予防法」では授業を開始する前に今、問題となっている新型コロナウイルス感染症について触れ、感染予防の重要性を実生活の面からも強く認識することができたと思われる。この授業では、感染予防対策の原則、滅菌・消毒等に関する基本的な知識を習得し、歯科医療現場における感染予防対策、医療安全について理解することを目標とした。演習では感染予防対策の基本である手指衛生（消毒）、滅菌・消毒・洗浄の実際について実習室の器材等を目で見て触れて体験したことで理解を深められたと思われる。また日常生活でのヒヤリ・ハット体験を収集したが、自粛生活による外出控えやアルバイトの減少等の影響により例年とは異なる状況がみられたことが特徴的であった。これらによりリスクマネジメントへの導入をはかり、その後、歯科医療現場におけるヒヤリ・ハット事例検討（グループワーク）を行うことにより事故防止への意識向上をはかった。「齲蝕予防処置実習」（前期）については授業評価アンケートの実施はなかったが、遠隔授業により動画配信（オンデマンド式）と資料配布により実施した。後半、対面での実習が可能となったもののマネキン（模型）のみであったが、対象はヒト（小児）であることを想定し実習、声かけ、対応を体験し、できるだけ人を対象とした実習を再現できるよう努めた。後期は感染予防対策に十分配慮し対面で授業を実施できたことは学生のコメントからも学生同士、教員との繋がりを肌で感じる機会となったと思われる。後期授業評価アンケート集計結果では学科平均点と同等または上回っていた。新たな試みである事前学習課題の提示、小テストの実施は学生に好評であった。コメントシート、提出レポートに対しては一人ひとりに丁寧な対応を心がけた。この点については継続して今後も実施していきたい。

II 今後の改善・工夫、学生に期待すること

新型コロナウイルス感染拡大の影響により初の遠隔授業となったが、学生同士が顔を合わせる機会や対面授業のよさを学生、教員ともに再確認できたと思われる。一方で授業方法の変化による効果も実感でき、ユニパを活用した効果的な授業方法を検討していきたい。また学生も積極的、主体的に授業に参加する姿勢を持ち続けてほしいと考える。

学科・専攻：歯科衛生学科 職名：助教 氏名：鈴木桂子
対象科目：歯科衛生士業務記録法（講義）・歯科受領支援論（講義）・歯科診療補助論（講義）

【歯科衛生士業務記録法（講義）】

歯科衛生士業務に関する記録の作成及び保存、記載項目については、歯科衛生士法施行規則や細則にて定められている。本講義では、診療録と整合性のある的確な歯科衛生士業務に関する記録が作成できる能力を修得する。

授業についての、科目平均点は4.73であった。「教員に授業に対する熱意が感じられた」という項目が一番高く、4.97であり同様に「教員は学生の理解が深まるように授業方法工夫していた（説明の仕方、事業形態、配布資料、板書、情報機器の活用など）」も4.97で喜ばしい評価であった。

また、「教員は学生が主体的に学びに取り組めるよう工夫をしていた」が4.90、「教員は学生に対して誠実に対応していた」が4.90であった。

コメントでは、何度も業務記録を書いて書くポイントがだんだん抑えられるようになった、わかりやすい説明をいただけたため理解しやすかった、合間に入る話がとても面白かった、自分で考えてソープを書く時間があつたので練習できてよかった

などといった内容が多かったが、最終課題が難しくこの講義で学んでいない内容も含まれていたと言う意見が1つあり、また評価については試験が新型コロナウイルス感染症の影響でユニパでのレポート提出となったことも分かりにくかった印象を与えてしまったかと思われた。今後注意していかなければいけない、あるいは丁寧に対応しなければいけないところであると考えている。

【歯科受領支援論（講義）】

歯科診療補助の実践には医科歯科連携が必須である。歯科衛生士は、かかわる医科疾患患者の全身疾患を概観し、口腔に現れる特徴と歯科診療時の注意点を把握し、歯科受療を支援しなければならない。本講では、講師による一方的な講義ではなく、学習者の能動的な参加を取り入れた教授法であるアクティブラーニングをとりいれて授業を進めている。

授業開始前にガイダンスを実施し、各学生にあらかじめテーマを割り振り、発表日時と発表方法について周知を行う。学生は、作成したPowerPointをUSB等に保存して持参し発表する。教員はチェックシートに沿って評価を実施した。評価項目は発表内容、図表の挿入の有無、声のトーン、発表時間とし、項目についてはガイダンス時に周知を行っている。進行は、司会者、タイムキーパーなどを設け学生主体で行っているところも本講の特徴である。

発表終了後は質問時間を設けており、8コマの授業の中で必ず1度は質問をするように伝え、どの学生が質問したかのチェックも行っている。

全体を通して、学生は非常に真面目に真剣に取り組み、全員が発表データの保存媒体をきちんと準備して授業に臨んだことは素晴らしかった。

授業評価として一番高かったのが、「教員は学生が主体的に学び取り組めるよう工夫をしていた」の4.94という点数であった。

全体的に良かった点を挙げてくれた学生が多かった。

例としては、「PowerPoint を作る事は大変だったが、良い経験になったし知識の定着度合いもかなり高かった」「自分からテーマのものを調べて発表することでより理解が深まったと感じる」などが多かった。

改善が必要だと思う点について「先生の説明がもう少しあると良いと思った」という意見があった。発表終了後には、説明は加えていたものの、こちらについてはそのボリュームも含め、次年度への活かしていく課題だと考えている。

【歯科診療補助論（講義）】

歯科診療補助は「歯科診療の補助」と「歯科診療の介助」で構成されており、歯科衛生の実践において重要な業務のひとつである。歯科衛生士は、診療の流れに沿った歯科診療補助を具体的に理解し、責任をもって実践していかなくてはならない。本講では、歯科診療補助の基本概念を把握し、歯科診療補助に関する基礎的知識を修得する。

歯科衛生学科 1 年後期の授業である。講義回数は、8 回と回数は多くはないもの、全講通して 1 人の欠席も遅刻もなかったのは素晴らしかった。

授業についての評価としては、当科目平均点は 4.78 であった。

評価が特に高かった項目としては、「教員は学生の理解度に配慮して授業を進めていた」の 4.90

「教員に授業に対する熱意が感じられた」の 4.90 であった。

自由記載のコメントは多数寄せられ、「先生が実際に歯科衛生士として体験した話をよくしてくださり、自分自身もこれから経験していく上でとても良い知識として取り入れることができた」

「先生の体験談はわかりやすくおもしろかった」「飽きずに最後まで集中して聞くことができた」などが多かった。

他方で、新型コロナウイルス感染症の影響下で、集合型の試験を原則避けるようにとのことで、当初予定していた対面での試験ではなく、レポートでの評価としたため、筆記試験で学習の到達度を測ってほしいと考えていた学生には不満があったと思われる。それが「成績評価の方法は適切であった」の 4.45 の点に反映されていると考えている。実際に履修している 1 年生からも、そういった声が直に届いた。

こちらについては途中からの試験に対する方針の変更について、きちんとした説明とわかりやすい対応をするべきであったと考えている。

学科・専攻：歯科衛生学科 職名：助教 氏名：中村和美
対象科目：障害者歯科学（講義）

I 授業の工夫

「障害者歯科学（2年後期）」は、障害者と障害者歯科について理解を深め、障害者の口腔の健康を支援・管理する上で、歯科衛生士に求められる基礎的知識を身につけることを授業の目的とした。「障害者歯科学」は3年次の臨地実習の障害児実習に直結する科目でもあり、障害を理解する上で重要となる疾患の原因、特徴、障害別の口腔の特徴について丁寧に説明を行い、可能な限り、写真を提示して印象に残るように努めた。また、教本には詳細に掲載されていない障害に関する法律の中から、特に「障害者差別解消法」を取り上げて、医療従事者としてどのような合理的配慮をすべきか、学生に考える機会を設けた。さらに、障害者に関するマークやシンボルを紹介し、その意味や対応の仕方等について説明し、障害のある方が困っている場面に遭遇した際には、学生達には勇気をもって思いやりのある行動を心がけてほしいこと、日常生活で周囲に意識して目を向けてほしいことを伝えた。授業資料は穴埋め形式を取り入れた。毎回の授業では、ふりかえりシートに授業の感想・質問を記入してもらい、質問と回答については、次回の授業で質問者以外の学生全体に向けて共有した。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「障害者歯科学」の令和2年度授業評価アンケート結果は、「I あなた自身の取り組みについて」の平均点は4.03、「II 授業について」の平均点は4.43であった。「III 遠隔授業の方法について」、全8回の授業は、感染防止対策を徹底して対面形式で実施した。「I あなた自身の取り組みについて」は、「1. そう思わない」と回答がみられた項目は、「1. 自分は、授業を受けるにあたりシラバスを読んだ」7.4、「4. 自分は疑問点を必要に応じて教員に質問した」11.1、「5. 自分は予習復習（提出課題を除き）をして理解を深める努力をした」3.7であった。ふりかえりシートで質問してくる学生はごく少数であり、ほとんどの学生が授業の感想というよりもその日に学修したことを記載する学生が多いが、学生には鋭い観察眼をもち、小さなことでも疑問に思ったことを質問できる授業の環境づくりに努めたい。授業の予習にはシラバスを見て次回講義内容の教本該当ページを熟読してもらい、復習には確認テストの導入も効果的だったかと考える。学生が能動的に学習する授業づくりが今後の課題である。

III 学生に期待すること

不明な専門用語や理解できない内容がある場合は、授業中に質問して解決する、ふりかえりシートで質問する等、わからないままにせず必ず確認してほしい。

学科・専攻：短期大学部・歯科衛生学科 職名：助教 氏名：藤田美枝子
対象科目：歯周疾患予防処置論（講義）、歯周疾患予防処置実習Ⅱ（実習）

1. 授業の工夫

対象科目となる2科目は、歯科衛生士の主要業務である歯科予防処置のうち、歯周疾患予防に関する科目である。

講義では歯周疾患予防に関する理論とその方法について理解すること、実習科目では手技・技能を修得することを目的としている。

- ・授業開始時に前回の授業内容に関する小テスト（遠隔授業の場合は課題）の実施及び解説を行い、事後学習の促しと、知識の定着を図った。
- ・講義科目では授業終了時にコメントシートを記載してもらい、授業内容に関する疑問点等を把握し、疑問点が残らないように工夫した。実習科目では、振り返りシートを活用し、実習に臨む前に自ら目標を立て、終了後に振り返りを行うことで、能動的な授業参加を促した。
- ・実習科目の成績評価の工夫として、筆記試験だけでなく、実技試験を実施し、技能の定着についても評価を行った。
- ・実技試験では、ルーブリックを作成・活用し、評価の客観性、公平性に配慮し、学生へのフィードバックを行った。
- ・動画教材を活用したり、器材に触れたりすることが可能な場合には実際に器材の操作体験を取り入れ、学生の理解が深まるよう、工夫した。

2. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

各科目の授業評価アンケート集計結果より、Ⅰあなた自身の取り組みについて、Ⅱ授業について、両科目とも4.5以上で概ね良好であった。アンケートの自由記述には、特に小テストや課題により知識の定着につながったといった記載が多かった。

上記の授業の工夫により、理解が深まったと思われる。

講義科目の遠隔授業については、授業は遠隔であっても、必要や希望に応じて器具を実際に触れる機会を設けたこと、課題の解説動画を配信したことにより、理解が深まったとの記載が多かったため、今後も遠隔授業を行う際には継続していきたい。

今後の改善点として、2科目とも「自分は授業を受けるにあたりシラバスを読んだ」、「自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した」の項目が、他の項目と比較して低かった。遠隔授業であっても、シラバスを読むよう促したり、質問をしやすくしたりする工夫が必要であると感じた。

また、新型コロナウイルス感染症の感染者が増加してきた時期に講義科目を遠隔授業に切り替えたことについて、「安心感を覚えた」といった意見があった。

学生が安心して授業を受けられるよう、感染対策に留意して授業を運営していきたい。

3. 学生に期待すること・学生への要望等

講義では、毎回新しく覚えることが多いですが、小テストなどで復習し、知識を定着させながら進めていきましょう。

実習では、まず器具の把持方法、固定など、基本的な操作方法を身につけましょう。

実技試験を受けるのが初めてで緊張する人も多いと思います。実技試験では、「自分ができていないところ」にばかり着目しがちですが、「自分ができるようになったこと」を認める機会にしてもらえると良いと思います。

学科： 社会福祉学科 職名：教授 氏名：佐々木 隆志 2020年度分
対象科目：・社会福祉論（歯2・講義）、・高齢者の生活の理解Ⅰ（介1・講義）、
・高齢者の生活の理解Ⅱ（介1・講義）、・児童福祉論（介2・講義）、
・保育実践演習・卒業研究（社2・演習）、・社会福祉演習（社1・演習）、
・ソーシャルワーク実習指導（社2・実習指導）、・ソーシャルワーク実習（社2・実習）、

令和2年度授業評価アンケート結果では、新型コロナウイルス感染拡大に向け講義の在り方について大変苦慮した。その第一の理由に、パソコンのカメラが購入できず、2か月程は。ユニバによる課題提示方法により進めることができた。その後、zoomを利用し、可能な限り通常の講義形態に近い方法で板書などを取り入れ、学生の受信状況をみながら進めた。評価の概略は以下の通り。

- ① 高齢者の生活の理解Ⅱ（介1・講義）、当該科目平均点 4.22、学科・専攻平均点 4.30、
- ② 高齢者児童福祉論（介2・講義）、当該科目平均点 4.06、学科・専攻平均点 4.30
- ③ 社会福祉演習（社1・演習）、当該科目平均点 4.66、学科・専攻平均点 4.13、
- ④ 保育実践演習・卒業研究当該科目平均点 4.42、学科・専攻平均点 4.13、となっている

介護福祉専攻、高齢者の生活の理解Ⅰ及びⅡでは、平均を下回っており、その反省が講義担当者に求められる。昨年度、講義のなかで全科目を通じて意識し教授した点は、国が2017(平成29)年に示した、「地域共生社会の実現に向けた取り組みの推進等」である。この内容は、2017年介護保険法改正の大きなポイントになっている。地域共生社会では障害の有無にかかわらず、地域の中で共に暮らす社会の実現に向けた内容である。筆者らは、講義の中で共生社会の実現に向けた具体的内容を講義してきた。講義評価が一部低い科目は、その内容が伝授されていない点が考えられ、今後の反省と受け止めている。今後、学生のニーズに対応した講義を更に研究する必要がある。児童福祉論の総合評価では、「この授業の熱意が感じられた」4.68となっている。この評価は、児童福祉の最新の課題とその要因、対策を具体的に示した現れといえる。

2021年度に向けた授業課題として、PDCAサイクルを機能させた、講義を展開したいと考えている。具体的には、講義を構成する要素として3つの柱をさらに考え講義を創りたい。

- ① 常に最新の情報を分かりやすく講義に心がける。
- ② 教室全体を明るく、ユーモアのある講義をつくる。
- ③ 年度途中で学生の講義に対するニーズ把握を行い、そのニーズに応じた講義を心掛ける。

また、最新の福祉の状況を常に学生に講義し、質の向上に心がけたい。その為には、学生のニーズに応えることが大切である。また、介護福祉専攻2年で開設されている「高齢者生活の理解Ⅰ」及び「高齢者の生活の理解Ⅱ」でそれぞれ国試対策の指定科目であるため、過去

問題を解説し 100%合格を目指した講義を展開したい。令和元年度には、介護福祉士国家試験合格 100%を達成した。今後、福祉系教員同士の情報共有も、講義の質を高めるために必要である。今後も対象学生が毎年異なる点を意識しながら、常に学生目線に立ち、学生の学ぶ視点を大切に、大学で高等教育を保障し、質の高い講義・演習を進めていきたい。また、学生が常に考え、五感を常に使いながら講義に臨む方法を考えたい。学生のコメント・評価ありがとうございました。

学科：社会福祉学科 職名：教授 氏名：三田英二

対象科目：

- ・子どもの理解と援助（演習）

I 授業の目標・工夫など

当該年度は、感染症のため、後期科目だけの授業評価となった。

例年と同様に、「臨床心理学」（講義）は、受講生（2人）が少数であったため、評価対象から除外されている。

評価対象となった「子どもの理解と援助」は、カリキュラム改訂により「保育の心理学Ⅱ」が名称変更された科目である。このため、「保育の心理学Ⅱ」同様、社会福祉専攻、こども学科で開講される。「保育の心理学Ⅱ」同様「子どもの理解と援助」は、演習科目である。このため、「保育の心理学Ⅱ」の時と同じように、基本的な知識が少ない中での演習は、受講生に、演習の方向性に戸惑いを感じさせると考えている。このため、例年同様、授業スケジュールの前半は、保育士養成カリキュラムで指定されている内容にそった演習になるような内容を取り上げた講義を行った。

社会福祉専攻とこども学科では、保育士資格取得のための選択科目として、「臨床心理学」が設定されているが、前述のように、受講生が少数であったため、評価対象とはならなかった。講義内容としては、相談援助を多角的に考えられるような授業展開をしていることは、例年通り、紹介しておきたい。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

毎年のことなので、例年通りの記述となってしまいが、アンケートの評価点は、標準偏差を加味して考えれば、概ね、平均的な評価であったと考えている。

例年記載していることであるが、科目の特性上、座学となってしまふ。前述のように演習科目であるが、演習につながるように講義期間前半は講義を行ったことは、前述の通りである。その後、講義期間後半でグループ発表を行い、発表内容に関するコメントをするかたちで、重要なポイントや関連事項など説明を行った。

演習科目であるため、他の方法もあるかと思うが、受講者数を鑑み、例年通り、グループで発表を行う方法をとった。グループで作業することで、子どもに対する理解が広がったというコメントが多かった。

配布資料の質や発表方法が年々高まってきていると感じている。受講生からは、資料を見ながら発表を聞くことで、理解が深まったというコメントも多くあった。

「子どもの理解と援助」に関しては、引き続き、例年通りの方法で実施していきたいと考えている。

学科：社会福祉学科 職名：准教授 氏名：江原勝幸
対象科目：社会福祉原論 II（講義）

I 授業の目標・工夫など

授業の目的は「社会福祉の原理と理念、歴史、法・制度等の基礎構造について体系的に理解する」こととし、授業の到達目標を以下に設定した。

- 1) 社会福祉の原理、対象、歴史、援助技術、担い手、組織運営と経営、制度など社会福祉の基礎構造を支える理論・仕組み（原論）を説明することができる
- 2) 社会福祉について自分自身の生活から見つめ直し、自分の言葉で「社会福祉とは何か」を述べることができる。
- 3) 新聞記事・テレビ番組などを活用し、狭義の福祉に限らず、現代社会の福祉的諸問題の光と陰について考察することができる

コロナ禍における今年度は、これまでの対面による授業ではなく前 15 コマを遠隔授業で実施した。その方法は 13 コマをユニパ経由の課題授業とし、2 コマは Zoom によるゲストスピーカー授業とし、求められている感染症対応の授業形態となった。これまでの授業評価において、社会問題に関するビデオ映像を用いた教材の活用は学生に高い評価を得ており、今年度はそれが実施できず、ネット上の記事や動画を指定し、それを閲覧・視聴する方法をとった。

取り上げた問題は、「自殺、過労死、安楽死、DV、災害、ネット依存、ゲーム障害、ひきこもり、ながらスマホ、パパ活、選挙」であり、その社会問題の背景・要因、現状、支援、課題など社会福祉の視点で捉え、考えをまとめさせた。

学生が提出した課題に対し、個々にコメントを付けて返答した。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

前期の「社会福祉 I」が社会福祉専攻及びこども学科 1 年次通年の講義科目であり、この科目はそこでの社会福祉の原理・原則、歴史、制度などの基礎構造を理解した上で、身近な現代社会の問題から広義の福祉の視点で問題の本質を理解し、必要な支援を考える発展的な内容としている。授業方法が大きく変わったと言え、授業のあり方や教育内容などは基本的に変更せずに実施した。

学生評価は全体的に学科・専攻平均点よりも当該科目平均点は高く、ほぼ昨年と同様であった。平均点が 4.8 を超えた項目は、「課題の適切性」「授業への熱意」「授業の難易度」「欠席・遅刻しない」「興味・関心増」であり、最も低い 3.31 が「教員への質問」とそれ以外の項目は 4 点以上であった。自由記述からは「的確なコメント」「授業資料のわかりやすさ」「多角的な福祉理解」が高評価であった。

遠隔授業における一定のスタイルを獲得し、効果的な授業展開ができているが、効果的な授業内容を考える授業準備と提出された課題への個々へのコメントに時間を要する課題が残

った。今後、遠隔授業が続くのであれば授業準備の時間は削減でき、コメントも個々の部分
は残すものの共通コメントを付ける工夫で時間的負担は軽減できるはずである。

対面・遠隔とどちらもメリット・デメリットがあるが、どちらにも適切に対応できるよう今
後も取り組んでいきたい。

学科・専攻：社会福祉学科・社会福祉専攻 職名：准教授 氏名：中澤秀一
対象科目：社会保障論（講義）、社会保障論（講義）、公的扶助論（講義）、公的扶助（講義）、
ソーシャルワーク実習指導（演習）

今年度は、新型コロナウイルス感染症に対応した遠隔授業が主であったため、対応が難しかった。Zoom による授業は、これまでと同様にパワーポイント資料を利用しており、授業の内容自体を大きく変えることはなかった。けれども、DVD の映像資料は Zoom で配信することは難しかったため、動画サイトで代替となる内容の動画を探して、その URL を提示することで対応した。場合によっては、YouTube の限定配信で授業を行った。これまでは実習期間中は休講にしていたのが、動画配信にすることで継続して授業を実施することができたので、今後もこのような対応は継続させていきたい。

また、それでも対面の授業を希望する学生の声があったため、後期からは遠隔と対面のハイブリットで授業を実施し、学生がどちらかを選択できるようにした。アンケートの自由記述欄には「**遠隔と対面のどちらかの授業形態を選べることができたのでよかった**」とのコメントが多くみられた（社会福祉専攻1年「社会保障論」自由記述欄より）。ハイブリット授業は、通常よりも準備に時間がかかるうえに、教室に居る学生とネットで閲覧している学生の双方に気を付ける必要があり、双方を把握する難しさがあった。とくに、ネットで閲覧している場合には、学生の様子を把握することが難しく、なかなか理解度を把握できていなかった。したがって、授業の終わりに質問を受け付ける時間を設ける等した。このような工夫は今後も続けていきたいと考えている。

演習科目についても、対面授業と遠隔授業をうまく組み合わせながら、担当教員で連携して個別に学生の実習指導にあたり、実習報告会や実習報告集で実習の成果を公表することができた。学生の学びは例年と変わらなかったと思う。

授業評価アンケートの結果では、「**授業はシラバスに沿った授業の計画と内容で展開されていた**」については、社会保障論（社会福祉専攻1年）で **4.72**（4.95）で、2019年よりも平均点が落ちていた（括弧内は昨年度の平均点）。また、教え方については、「**学生の理解が深まるように授業方法を工夫していた**（説明の仕方、授業形態、板書、配布資料、視聴覚機器など）」については、社会保障論（社会福祉専攻1年）で **4.83**（4.86）であった。今後は改善を心がけたい。とはいえ、「Ⅱ 授業について」の平均点は 4.65 で、学科・専攻平均点 4.38 は上回っており、一定の水準は保てたのではないかと考える。

「Ⅲ 遠隔授業の方法について」では、「**遠隔授業の方法は、授業内容の理解の上で適切だった**」は、社会保障論（社会福祉専攻1年）=4.83、公的扶助（介護福祉専攻2年）=4.63 等、比較的高い評価であったと考える。遠隔授業は、引き続き次年度以降も続くので、学生のニーズを把握しながら、さらに工夫を重ねていきたい。

さいごに、学生には主体的に授業に関わるように、積極性をもって授業に臨んでもらいたい。

学科名：社会福祉学科 職名：准教授 氏名：松平千佳

対象科目 ソーシャルワーク論Ⅱ ソーシャルワーク演習Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ ソーシャルワーク実習指導 ソーシャルワーク実習 学科共通科目「ホスピタル・プレイⅠ(入門編)」「ホスピタル・プレイⅡ(障害児編) ホスピタル・プレイ・スペシャリスト養成講座

I. 授業の目標・工夫など

昨年度は、コロナの影響で対面授業ができない時期が続き、多くの変更と工夫を強いられた。特に、私が担当する授業は社会福祉士養成の中で中核的な位置づけとなる演習科目であるため、対面ではない方法でSWの技法を教えることに工夫を要した。また、多くの教員が課題の取り組みを指示し、提出をもって出席とする方法をとっていたため、学生はレポートの作成に追われていた。

大学に来ることのできないストレスや孤独感に加え、時間的にレポート作成に追われる状況があったため、日常生活の中から福祉の課題を考えたり、文章ではない方法で自分の意見を表現する方法を提示した。たとえば、スマホで画像を撮る課題を提示した。これは、コロナ禍でソーシャルディスタンスが日常生活にどのような影響を与えているのか、散歩をしながら画像として確保しよう、という課題であった。

学生はひっかかった場面を写真に収め簡単な解説を加えて共有するという作業を行った。この作業を通して、同じように「？」を感じている仲間がいること、時にコロナが日常生活に必要以上の影響を与え、人々の生きづらさを生んでいることなどをZoomにて話し合った。課題も対面がかなったときにまとめて提出する方法をとり、なるべく学生が自分のペースで課題に取り組めるように配慮した。ただ、この方法は自己管理できない学生には不向きだった為、2名ほど課題を整えて提出できない学生が出てしまった。

ライフヒストリーの聞き取りを通して、人間の生を全人的にとらえるという課題だけは対面で行いたいと機会を待った。

ソーシャルワーク演習最後の5回だけは演習を対面で実施できる状況となったので、「人の人生に敬意をもって接する」体験授業を行った。この経験を卒業前に何とか押し込むことができ、学生もよかったと評価しているようだ。

実習教育においても、教員の連携強化により何とか乗り切れたと考える。実習先の確保は大きな課題であったが、柔軟に教員同士が、また実習施設と協力することにより実習教育が可能となった。

実習巡回指導についてはライン電話を多用したため、学生の不安は少なかったようである。

II. 授業の自己点検・自己評価

コロナに振り回され多くの変更を余儀なくされたが、その中でも学生に気づきやモチベーションをある程度保つことのできた評価が返ってきていることに満足している。

自由記述には、自分と向き合う大切さを学んだなど、コロナによって作られた静かな時間を

有効に使った学生の記述もあった。

変わらず「しんどいけど楽しい授業だった」との感想が聞けたことは大変うれしい。

毎年書くことだが、本学の学生はさまざまな生活課題を抱えながらも懸命に生きている学生が多い。それらの学生は自分の抱えている課題を俯瞰してみることができるようになるためにも、家族の問題、貧困や虐待、DVなどの問題を細心の注意を払いながらも学びの中に取り上げていきたい。

学科・専攻：社会福祉学科社会福祉専攻 職名：講師 氏名：佐々木将芳
対象科目：特別な教育的ニーズの理解と支援（演習）、ソーシャルワーク論Ⅳ（講義）

講義におけるねらいと工夫

特別な教育的ニーズの理解と支援は1年次配当科目であり、保育所実習やソーシャルワーク実習に臨む前に、障害についての基本的な理解と援助内容を学ぶことを目的としている。そして、「障害」についての基礎的知識を習得する過程で、これまで学生自身が抱いていたであろう「障害」に対するイメージを再構成することを意図している。

ソーシャルワーク論Ⅳは2年次（後期）配当のため、ソーシャルワーク実習を終えた学生に対して発展的理解とソーシャルワークにおける価値・技術の再確認、そして実践者として現場に向かうための心構えを持つという位置づけで講義を行った。

講義についての自己評価と今後の改善・工夫

それぞれの講義ではできる限り具体的な事例や社会問題を提示し、学生にとって各回の内容をイメージできるよう心がけた。特に1年次科目は障害などの専門的知識に内容に初めて触れるケースも考えられるため、より丁寧に語句の説明なども行った。

2年次科目では、学生のそれまでに行ってきた各実習での経験も可能な限り振り返られるよう心がけ、学生自身の経験、体験と理論が結びつけられるように講義を進行した。

各科目、その意図を理解されたように感じる。学生にとって、「この分野に対する興味・関心増した」、「授業に意欲を持って受講した」などの項目が概ね「そう思う」「ややそう思う」との回答であった。しかし、専攻平均から低い項目や標準偏差の値が大きい項目が見られたため、まだ改善の余地は多分に残されていると思う。とくに遠隔授業の実施において、学生の通信料負担や資料の印刷といった点で、授業による効果と、学生負担軽減の両面からよりよい実施方法を見つきたい。

その上で、学生自身の体験や興味に引き寄せられるような指導方法を考えていきたい

学生に期待すること

専攻平均でも同様の傾向が見られることだが、疑問点などについて質問する学生の少なさは課題として感じられる。講義の中で必ずしも受講者全員の理解度に合わせた進行ができないケースもある中で、学生自身が主体的に自らの進行業況を理解しそれを補うような姿勢を期待したい。少人数教育を実施しているからこそ、受け身ではなく積極的な姿勢をもつきっかけにしてもらいたい。

教員も、学生の知りたい意欲や学びたい要求に十分応えられるよう、質問・疑問を問いかけ促すような工夫を行っていきたい。

社会福祉学科介護福祉専攻 教授 高木剛

介護福祉論Ⅱ(講義)、発展介護技術(講義・演習)、発展介護過程(講義)

I. 授業の目標・工夫など

1) 介護福祉論Ⅱ

授業の目標は、社会福祉士及び介護福祉士法の概要、職業倫理、リスクマネジメントなどについて理解するとともに、これらを他者に説明できることである。授業では、難解な専門用語の使用はできる限り避けるとともに、要点をまとめたレジュメのほか、関連資料の配布、最近の新聞記事の紹介をする等の工夫をした。

2) 発展介護技術

授業の目標は、介護技術の目的と介助の手順を理解し、その留意点と根拠を説明できることや、介護技術に必要な観察、アセスメントを実践できること等である。授業では、担当教員ごとに少人数のグループを編成し、介護実習で取り組んだ課題を題材としてグループごとに介護技術の観点からよりよい方法・手順等について検討した。また、学修効果を高めるために発表会(動画、パワーポイント等を使用)を開催し、意見交換ができるように工夫をした。

3) 発展介護過程

授業の目標は、介護実習における介護過程の実践的展開を目指し、これまでに修得した知識・技能を活用すること、また、チームの一員として介護過程の展開に係る意見交換等を行えること等である。学生の介護過程展開の力量を高めるために、担当教員ごとに少人数のグループを編成し、ケアカンファレンスを開催するなどしてグループ内で意見交換ができるように工夫した。

II. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

1) 介護福祉論Ⅱ

「授業について」及び「遠隔授業の方法について」の平均点は、それぞれ「4.41」、「4.30」であった。また、学生のコメントとして、「自分で調べるなどの学びを深められた」、「資料などがわかりやすくまとめられていて、理解することができた」、「知識の幅が広がった」、「レジュメがまとまっていた」「仕様上 Word が繋がらなくて、資料の文字が見にくい箇所があった」との記載があった。授業の工夫等により、概ね学生の満足感を得ることができたと考える。

2) 発展介護技術

「授業について」及び「遠隔授業の方法について」の平均点は、それぞれ「4.49」、「4.44」であった。また、学生のコメントとして、「グループワークであったため、学びを深められた」「プレゼンテーション能力が向上した」、「要点をまとめる力がついた」、「担当の先生により指導に差が見られた」、「グループワークの時間がもう少しほしい」との記載があった。授業の工夫等により、概ね学生の満足感を得ることができたと考えるが、より一層学修効果を高めるためにグループワークの時間をもう少し確保できるように授業のスケジュールを調整したい。

3) 発展介護過程

「授業について」及び「遠隔授業の方法について」の平均点は、それぞれ「4.45」、「4.33」であった。また、学生のコメントとして、「先生の返答が早くて、すぐに修正できた」、「個々の担当教員から指導を受けることができた」、「カンファレンスはとても勉強になった」、「遠隔で授業した時、先生と話す（相談する）ことができなかつた」との記載があった。授業の工夫等により、概ね学生の満足感を得ることができたと考えるが、コロナ禍においてやむを得ず遠隔で授業する場合に備え、学生が各担当教員と密に連絡を取れるように Zoom や e-mail などの活用について検討したい。

学科・専攻：社会福祉学科・介護福祉専攻 職名：教授 氏名：立花明彦

対象科目：障害者福祉論（講義）、障害者の生活の理解Ⅰ（講義）、障害とコミュニケーション技法（演習）、リハビリテーション（講義）

今年度、担当している標記科目は、新型コロナウイルス感染拡大状況とその中での学生の負担を考慮し、全てユニパを用いた遠隔で実施した。

授業は毎回、その日のテーマについて資料を作成し、理解度を確認するための課題を提示し、その提出を求めた。授業の資料作成に当たっては、重要となる点、押さえてほしい事項は赤字で記し、目立つようにした。また、資料の冒頭には毎回、その時々教員が思ったこと、感じたこと、学生に伝えたいことなどをメッセージとして記し、無機質な資料にならないよう、少しでも人間味のあるものにしようと心がけた。さらに、提示した課題については、次の授業時に正答と解説、学生の解答傾向等を記したプリントを示し、各自が振り返られるようにした。通信教育のような授業になったことは否めず、それだけに学生の評価は気になるところであった。

評価項目の「遠隔授業の方法について」では、「障害者福祉論」が4.56（学科平均4.03）、「リハビリテーション」が4.57（同4.14）、「障害とコミュニケーション技法」が4.67（同4.40）と、平均を上回る結果となっていて、安堵すると同時に、一応の支持を得られたと理解している。実際、自由記述欄の「良かったこと」には、「解説もわかりやすく、課題の量もちょうど良くて、とても受講しやすかった」「次の授業時に、前回の復習やフィードバックがあって良かった。課題も主体的に取り組むものが多く、自分のためになったと思う」「レジュメを参考にしつつ、新たに自分で調べて取り組むことができる課題だったので、ただレジュメを写すだけにならず、理解を深められた」などの声が寄せられている。これら3科目は、他の評価項目「あなた自身の取り組み」や「授業について」でも学科平均を上回った。

一方で、「障害者の生活の理解Ⅰ」は、いずれの項目も0.37ポイントから0.32ポイント平均を下回る結果となっているのは驚きである。「良かったこと」の欄には、「課題が取り組みやすい量であった」「資料がきれいにまとめられていて、読みやすかった」の記載があり、教員の思いが少しは届いたと察せられ、多少救われたが、残念であり、事実として受け止めて改善を図らねばならない。「あなた自身の取り組み」の項目が、「障害者福祉論」や「リハビリテーション」よりも低い結果であることは、「障害者福祉論」と「リハビリテーション」が選択科目であるのに対し、この科目は必修科目であることが影響していると思われる。しかしながら、他の項目でも、担当する科目の中で一番低い数値となっていることは不可解である。従来、「障害者福祉論」と「障害者の生活の理解Ⅰ」は、ねらいとする点に共通項があることから、資料や授業方法に類似したところがあったが、「障害者の生活の理解Ⅰ」の結果は、それでは通用しないことを示唆しているとも言える。学生の学力、意欲、集中力等の差が評価結果に現れているようにも推測され、授業で配付する資料の構成、表現、口頭での説明の仕方など、抜本的な見直しの必要がある。意識し、学生と向き合い、できることから改善をしていきたい。

学科：社会福祉学科・介護福祉専攻 職名：准教授 氏名：奥田都子

対象科目：介護実習指導Ⅱ（演習）、子ども家庭支援論（講義）・・・個別アンケート結果がある科目

家族福祉論（講義）、生活支援技術Ⅰ（演習）・・・遠隔授業に関するアンケートの対象科目

I 授業の目標・工夫など

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、はじめてのオンライン授業への対応が課題となった。学外実習については、実習施設との連携・協力のもと、1カ月半遅れで7月に実施可能となったが、「介護実習指導Ⅱ」はほぼ遠隔授業で対応し、前期の実習報告会を中止として、実習報告書に置き換えた。「家族福祉論」「生活支援技術Ⅰ」については、授業の8割を遠隔授業で実施したが、感染レベルが一段落した8-9月の3回は、対面のグループワーク、ロールプレイを実施し、知識と体験の共有化をはかった。

後期は感染リスク回避のため、「子ども家庭支援論」を遠隔で始め、学外実習後は対面授業に切り替えた。この科目は、既習の知識や技術を、保育現場を想定した事例の中で適切に活用し、家庭支援の実践力向上をはかることを目標とするため、感染防止対策を十分にとったうえで、ディスカッションによる保護者対応の失敗事例を検討し、改善に向けてのロールプレイを重ねることにより学習効果をねらった。

II アンケート結果に対する自己評価と今後の改善・工夫

前期については、個別の授業アンケートは行われず、代わりに実施された、特定科目を対象としない「遠隔授業に関するアンケート」の結果を手がかりとする。回答結果で注目されるのは、「教員のコメントが次の課題への取組みにつながったり、励みになった」と答えている学生が64.4%に上ることである。

例年の対面授業では授業ごとにリアクションペーパーの提出を課し、理解度の把握に活用するとともに、学生からの質問や感想に対して、個別にコメントを返す方式をとってきた。これに対して、前期遠隔授業期間中は、テキスト学習+課題提示形式での授業を主としており、毎回の課題に対する学生の回答をまとめ、良回答や優れた視点などを紹介する解説を毎回発信した。

個別のコメント返却よりも時間と労力を要したが、クラスメートとの意見交換もなく孤独に課題に取り組む学生にとって、他の学生がどう考えているかを知ることが学習の励みになることを意図しての工夫である。

アンケート結果から、コメントのプラス効果が確認できたので、今後もこまめにコメントを返し、励ましやねぎらいを伝えるとともに、共有化をはかりたい。

後期授業では、年末年始と国家試験直前を除いて対面授業を実施し、2つの科目について授業評価アンケート結果が得られた。「子ども家庭支援論」では保育士役と保護者役を演じることを通して援助のありかたを体験的に学ばせるロールプレイを全員が交替して行ったが、学生による授業評価は学科平均をすべて上回っており、自由記述回答でも「実際に自分たちで演じて学ぶことが多かったため、理解しやすかった」「ロールプレイを通して学びを深めることができた」「ロールプレイがとても印象に残り、今後活かしていきたいと思った」など、概ね良好な反応であった。

また、「介護実習指導Ⅱ」については、遠隔指導での質問のしにくさや、メールでのやりとりに時間を要するなど、対面授業時にはなかった意思疎通の難しさを訴える回答が寄せられ、今後も続くことが予想される遠隔指導において一層の工夫が求められる。

全体の総括として、グループワークやロールプレイなど学生が自ら展開していく力を活用した授業形式は、対面授業が激減するコロナ禍においては、学びの意欲を喚起し、授業への関心・集中を高めることに効果があったと感じる。また、大多数の学生が、コメントを通して教員からの励ましや評価を期待していることが明らかになったため、今後も、学生とのキャッチボールを心がけ、意欲を引き出す工夫を続けたい。そして、遠隔指導における意思疎通や効果的なプレゼンテーション方法において、新たな工夫を模索し、学生が積極的に取り組めるような授業方式を探っていきたいと考える。

学科・専攻：社会福祉学科介護福祉専攻 職名：講師 氏名：木林 身江子
対象科目：身体のおしくみⅠ（講義）、介護過程Ⅳ（講義）、医療的ケアⅠ（講義）、
医療的ケアⅡ（講義・演習）、医療的ケアⅢ（講義・演習）

「身体のおしくみⅠ」は、テキストに沿って問題（課題）を作成し、全回遠隔授業を実施した。各回の問題（課題）は、学生がテキストを熟読することによって回答することができるよう作成した。また、国家試験を念頭におき、特に重要な部分を課題に示すよう配慮した。学生から提出された回答は、採点したのちに解答を提示するようにした。15回でテキスト全体の学習ができるような進度で実施し、課題の量・難易度は学生の提出状況および回答の内容から概ね適切であったと考える。しかし、映像や参考資料等の提示や、途中でミニテストを取り入れたり、質疑・感想を求めたりする等の工夫があると、学生の理解はさらに深まったと思われる。

「介護過程Ⅳ」は、心臓、呼吸器、腎臓、膀胱・直腸、肝機能障害のある人に対し、医学的知識に基づいた介護過程の展開ができる能力を養うことを目指している。令和2年度は、全回遠隔授業とした為、提示する資料は例年以上に改善に努めた。1年次の「身体のおしくみ」の復習を含め、図表や挿絵だけでなく、これまで対面授業で説明してきた内容も加え、学生が理解しやすいことを意識し改良した。毎回、資料に基づいた課題（問題）を提示することにより、資料を隅々まで読むよう学生に促した。これにより、基本的な知識の習得にはつながったと評価できる。しかし、介護過程の展開については、取り組みの内容の縮小、説明不足が考えられた。特に事例については、動画視聴を促す等の工夫が必要であったと考える。

「医療的ケアⅠ」は、介護現場において医療従事者と連携しながら、経管栄養や痰の吸引などの医療的ケアを安全に提供できるよう、基本的考え方や知識および実施手順について理解することを目的としている。例年は、映像視聴やグループワークを含めながら、介護福祉士として必要な視点・思考・対応を考えさせ、医療的ケアへの関心を高められるよう工夫してきたが、令和2年度は全回遠隔授業として実施した。主に、テキストの各章に提示されている設問に取り組むことで、基本的な知識の習得を目指した。提出されたレポートの内容からは、概ね適切な理解がなされたと評価できた。また、最終講はゲストスピーカーを招聘した。ズームでの講義であったが、豊かな生と死について医療的ケアの視点から考える契機になり、良い刺激になったと思われる。次年度以降も、現場での取り組みについて授業に含めていきたいと思う。

「医療的ケアⅡ・Ⅲ」は、経管栄養、喀痰吸引の技術演習・技術試験を主な内容とし、例年実施してきた用手微振動やポジショニングなど関連する技術演習については、感染予防のため取り止めた。講義部分は遠隔授業として、テキストを中心とした課題に取り組んでもらい、後半は対面形式で

演習を実施した。感染予防のため、1グループあたりの学生数を少なくし、密にならないようなスケジュールを組み実施した。

学生たちは、集中して練習をし、準備・練習・片付け、技術試験まで、非常に効率よく能率的に演習を実施することができていた。感染対策をはかりながら、落ち着いた環境のなかで練習に励み、技術試験にも意欲的に取り組むことができていた。次年度以降も、グループダイナミクスを発揮してコロナ禍でも効率よく学習が深められるよう、授業内容・方法の工夫に努めたいと思う。

学科・専攻：社会福祉学科介護福祉専攻 職名：講師 氏名：天野 ゆかり
対象科目：介護過程 B（講義）

介護過程 B

本科目は、疾患や障がいのある方への介護過程の理解と展開、ICT を活用した記録等に関するもので、学生にとってはやや難しい科目でもあった。遠隔をベースにした授業であったため、映像資料の活用や Zoom など学生が興味を持って参加できるよう工夫した。また、現場で活躍する多彩なゲストスピーカーを招聘し、より介護記録の重要性や現場における ICT の活用がイメージできるよう工夫した。その結果、これらの取り組みに対して学生からの評価が得られた。一方で、遠隔授業の際の課題提出に関しては指定文字数の多さが負担に感じた学生が数名いた。

学科：社会福祉学科 職名：講師 氏名：濱口晋

対象科目：コミュニケーションⅠ（講義）、コミュニケーションⅡ（講義）、介護過程C（演習）、
介護実習指導Ⅰ（演習）、介護福祉演習（演習）

I 授業の目標・工夫など

「コミュニケーションⅠⅡ」及び「介護過程C」授業の目的は以下の通りである。「コミュニケーションⅠ」で介護におけるコミュニケーションの基本を学習する。「コミュニケーションⅡ」ではコミュニケーション障害がある利用者とのコミュニケーションの技法の基本を身につける。「介護過程C」では、聴覚・言語障害のある利用者への介護過程の展開方法について説明できる。これら3科目を、コミュニケーション技術の基礎・応用・発展とそれぞれ位置づけて、段階的に授業を計画し実施した。

特別養護老人ホーム等高齢者施設や障害者支援施設等障害者施設等で介護福祉実践する上で、役立つように、失語症等の言語障害や加齢性難聴等の聴覚障害について重点的に取り上げた。工夫した点は、新型コロナウイルス感染症予防にも努めながら、対面授業をできるだけ実施し、演習を取り入れるようにした。演習時には、マスク着用とフェイスシールドを使用したため、マスクやフェイスシールド使用時のコミュニケーション技術を考える演習を行うことができた。多種多様なコミュニケーション障害を理解し、障害に応じたコミュニケーションの技法を実際にわかることができるよう、対面授業の中でDVD等の視聴覚教材を使用した。また、単に視聴するだけでなく、障害を持つ利用者の状態を各自が考え、判断し、適切なコミュニケーション技法を選択し、実施していくという演習を行った。しかし、例年行っていた読話で実際に言葉を読みとる演習については実施できなかった。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「コミュニケーションⅠ・Ⅱ」について

(II 授業について 平均 4.34 範囲 4.20～4.47)

「(10) 授業はシラバスに沿った授業の計画と内容で展開されていた」は、昨年度類似した質問項目は 3.94 であったが、今年度 4.20 と評価が若干改善した。「(12) 教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた」・「(9) 教員は、学生の理解が深まるように授業方法を工夫していた」の項目は、『対面授業時にわかりやすく説明があり、またDVD視聴やグループワーク等でコミュニケーション障害について知ることができた』との自由記述があった。【早口で話さない】 【簡潔に話す】などを心がけた点がよかったと考える。今後も丁寧に説明していきたい。過去には、『パワーポイントのスライドが速い』や『話す口調やタイミングによりわかりにくい』などの意見もあり、今後もわかりやすく話すよう心掛けたい。

(III 遠隔授業の方法について 平均 4.36 範囲 4.33～4.40)

「(21) 遠隔授業の方法は、授業内容の理解の上で適切だった」「(22) 遠隔授業は、学生が興味を持って取り組めるよう工夫がされていた」の項目では、『学生の状況を考えて授業形態を変えてい

た』との意見があった。一方で、遠隔授業における課題提出後、講評等事後指導が十分にできなかった点は、改善していきたい。

今後も授業内容の構成や流れが学ぶ側にとって、適切なものとなるように、授業を計画的に展開し、学習者の理解度に応じて、柔軟に修正できるように改善していきたい。一人ひとりの学生により丁寧に対応していきたい。

「介護過程C」については、「コミュニケーションⅡ」を応用発展した演習を例年実施していたが、対面授業が1コマで、残りの4コマは遠隔授業で実施した。そのため、遠隔授業への対応が十分にできなかった。令和3年度後期より、新カリキュラムとなるため、遠隔授業になった場合でも、教育内容が低下することがないように、再検討して臨みたい。複数教員のオムニバス形式の授業でもあるため、他の教員と一緒に見直しをすすめている。

「介護実習指導Ⅰ」については、評価全体において、4.43～4.71 昨年度 4.36～4.45 に比べて若干改善した。コロナ禍であったが、実習に関する科目であったため、全体指導や個別指導ともに、できるだけ多く対面授業で実施した。今後も実習指導のため、介護実習や実習施設のことが具体的にイメージできるような、わかりやすい授業を心がけていきたい。

「介護福祉演習」については、評価全体において、4.57～4.81、昨年度 4.84～4.91 に比べ、評価が若干低下した。遠隔授業が中心だったため、授業に関する質問等に十分に答えることができなかったことも一因である。しかし、ユニバーサルパスポートやZOOM等積極的に活用した結果、学生の自主勉強を促し、効果的に活用できることもわかった。その結果、2年連続介護福祉士国家試験合格率100%を達成し、令和2年度から公表された養成施設別合格率も合格者数で全国3番目の結果を収めることができた。今後も学生が自主的に継続して勉強できるような工夫を考え、実施していきたい。

学科・専攻：社会福祉学科介護福祉専攻 職名：助教 氏名：大石桂子

対象科目：基礎介護技術（講義・演習）、認知症の理解Ⅰ（講義）、発展介護技術（講義・演習）、介護実習指導Ⅰ（講義・演習）、介護過程Ⅰ（講義）、発展介護過程（演習）、応用介護技術（講義・演習）

基礎介護技術、応用介護技術について、学生からの授業評価コメントからは、わかりやすかった、教員へ質問しやすく理解できた等、授業内容や方法についての評価は高く、授業内容に問題はなかったと考えている。同科目では非常勤講師とも連携を図り、常に授業内容の精査、検討を行い、最新の介護技術を指導することができた。また、遠隔授業の演習では、自宅でも十分な演習が行えるように、介護食や排せつ用品などを事前に学生に配布し、体験するための授業資料を基に各自で体験し、レポートを作成するよう指導した。その結果、学生からは、自宅にいながらも、利用者の立場になって考える体験ができた、教室で実施するよりも、特に排泄体験については人の目が気にならず、落ち着いて演習ができた等のコメントが聞かれた。介護食や排泄の体験などは、学内で演習するよりも自宅で実施したほうが自分のペースで、落ち着いてできる演習もあることがわかったため、対面・遠隔の両形式で実施していきたいと考える。

発展介護技術では、前半は遠隔授業での対応となったが、担当教員が学生の意見等を随時聞くことにより、特に問題なく実施できた。後半では対面授業にて学生のグループワークが中心となったが感染症対策を充分に行い、問題なく実施できた。

認知症の理解Ⅰや介護過程Ⅰの講義科目においては、遠隔授業が中心となった。学生の理解度を図るため、毎回課題の提出を求めた。一部の学生からは、課題のレポートの文字数が多くて負担だとの意見が聞かれた。課題レポートでは、文献を用いて1500字から2000字程度の文字数での提出を求めているが、学生からの意見を踏まえ、今後は課題レポートの文字数を減らすことと、授業内容に関する問題形式の課題を出すことで対応していく。

介護実習指導Ⅰでは、新型コロナウイルス感染症の影響により、学外実習の延期や学内演習への切り換え、ゲストスピーカーとして現場の介護実習指導者による講義を遠隔対応にするなど、例年との変更点が多々あった。しかし、担当教員との連携や、授業の内容が不足しないよう適宜対応できた。学生からは、対面授業ができなかった部分については残念だが、授業内容は十分理解できたとのコメントがあった。

発展介護過程については、対面での授業ができなかった部分については、遠隔での対応で実施した。遠隔授業の形態をとることで、例年に比べて学生の指導時間が確保することができ、十分な指導ができた。今後も、対面形式と遠隔形式を組み合わせ、学生の指導にあたりたいと考えている。

学科・専攻：こども学科 職名：教授 氏名：小林佐知子

対象科目：①発達と老化Ⅰ（講義）：介護福祉専攻1年

②教育心理学（講義）：こども学科専攻2年

③子ども家庭支援の心理学（講義）：社会福祉専攻2年・こども学科2年

1. 授業についての自己評価

遠隔授業（オンデマンド）を中心に、一部対面で実施した。動画作成などは本年度が初めての取り組みの連続であり、学生の反応がわからないため手探り状態で進めた。

課題提出状況は良く、ほとんどの課題は期限内に提出されたが、一部の学生の出席率が良くなかった。①発達と老化Ⅰでは補講をしてほしい旨学生から要望があり、2名の学生に補講を行った。コロナ禍とはいえ、どこまで学生への配慮をすべきか判断が難しかった。

アンケート結果では、学生からの評価点は概ね学科平均と同レベルになっており、大きな問題はないと感じられた。自由記述を見ると、①発達と老化Ⅰ、②教育心理学は“具体例が多くてわかりやすい”“動画や資料が見やすい”という肯定的な意見が散見され、オンデマンド式の授業でも内容の理解はされているように思われた。

2. 今後の改善・工夫

自由記述で1点要望があり、“遠隔授業でも zoom などで学生の反応や疑問に耳を傾けてほしい”とのことであった。Zoom の授業を行った際、通信状況から授業に入れない学生がおり、それ以来オンデマンドに切り替えて実施してきた。学生の中にはコミュニケーションを希望する人もいることがわかったので、今後はできる限り対面にする、zoom を取り入れるなど学生の反応を見る工夫をしていきたい。

3. 学生への要望等

遠隔授業の場合も授業日にきちんと受講してほしい。
ユニパのコメント提出日時を見ると、一部の学生は締め切り時間ぎりぎりに提出している。学生の負担を配慮して提出期限を1週間くらいにしているが、多くの学生は授業日に受講をしていない様子で、どのようなスケジュールで受講しているのかが気になった。また、①発達と老化Ⅰは、授業内容と違うコメントをする人が一部にいて、動画を見ないでコメントを書いているのではないかと疑うときがあった。

学科：こども学科 職名：教授 氏名：永倉みゆき

個人科目：教育原理（講義）教育課程・保育計画論（講義）幼児教育者論（講義）

保育内容（言葉）（演習） 保育内容（総論）（演習）

共同実施科目：教職実践演習（共同）卒業研究（共同）

本年度は、急なりリモートの実施や、自由な話し合い、発言などができない形での実施だったので学生特に1年生は大変だったことだろう。感染防止など考えてできる限りのことは実施したが、例年とは違う部分が多かった。その割には評価（満足度）が例年と大きく違わなかったのは、学生側の努力も大きかったのではないかと思う。

2年生の科目「保育・教職実践演習」「卒業研究」については、いずれも評価が平均よりはかなり高く、これはいずれも少人数での対面実施科目であり、グループワークやフィールドワークがあったことの影響が大きく、コメントにもそれらについての意見が多く見られた。大学でゼミをやることの意味を再確認した思いである。

1年生の科目4つは、ほぼ対面で行ったため、Ⅲの解答は自分の科目にはあまり当てはまらないものである。また全体的に4の「質問ができた」5「予習をした」が低かったが、これは致し方ない部分があり、5については、全体の課題量が例年より多かったため予習復習をするゆとりがなかったのかもしれない。

各科目について言えば、「教育原理」に関しては、例年同様、図書館の本を使って調べ、発表するという形式をとった。コメントにはそれがよかったという意見が多く載っていたが、一方で15「課題の量が適切か」を見ると「2あまりそう思わない」の回答も多く、学生による差が大きかった。「教育課程・保育計画論」では、ⅠについてもⅡについても、社会福祉専攻の学生の評価の方が、こども学科の学生より総じて高く、これは特に4や15の「課題の量の適切性」について、こども学科学生の方には大変だったという意見が多かったからと考えられる。また「指導案にコメントが欲しい」という要望があったが、授業内ではいくつかの例を挙げて自分で添削させ、最後の課題のみ個別にコメントする形で行うようにしている意味を、授業内で説明する必要を感じた。「保育内容指導法（言葉）」では、「授業内で調べたことが自分の知識になった」というコメントがあり、そのように前向きに捉えてくれたことを嬉しく思う。「課題の量が少し多かった」という意見については、課題は殆ど出していないので他の科目と混同されたのかもしれない。

以上のように、今年度は例年に比べ、特にこども学科の学生の中で大変だったという者が多くいたように感じられた。教員側としても、授業内で感染防止のため例年より学生が遠く、雰囲気を感じる事ができず調整するなどの対応ができなかった。来年度も同様な状況が続くと考えられるが、できる限り満足の行く授業になるよう工夫していきたいと思う。

学科・専攻：こども 職名：教授 氏名：朴淳香

対象科目：保育内容の理解と方法Ⅱ（身体）（演習）、保育内容指導法（健康）（演習）、

1. 授業の工夫

後期は第1回から3分の1程度を対面で実施し、新型コロナウイルスの感染状況が増加傾向に転じたタイミングで遠隔授業に切り替えた。「保育内容の理解と方法Ⅱ（身体）」については、フィールドワークと身体表現の実践を行う予定であったが、選択学生のみということもあり、感染防止に最大限配慮し、対面授業に近い形を取り、なおかつ遠隔のメリットも取り入れながら実施することを試みた。具体的には、フィールドワークは感染防止対策を施している施設および屋外での活動を中心にプログラムした。また、身体表現については、例年、学生の創作プログラムを児童館とこども園で実践する場をお借りしていたが今年度は訪問の形はとらず、創作部分に時間を注いだ。保育者が行っている様子を記録した動画を丁寧に分析し、創作プロセスを明らかにし、その上で各自のオリジナル台本を創作、実践、発表、振り返り（学生同士の評価）に時間をかけて行った。「保育内容指導法（健康）」については、映像教材を用いるテーマの回を前半で実施し、教科書を使った事例研究を遠隔授業の回で実施するなど、授業内容の順序性に影響が少ない範囲でシラバスの変更を行った。

2. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「保育内容の理解と方法Ⅱ（身体）」については、学生は実践（実技）の割合が高い授業に対してはできる限り対面授業で受講への期待が大きいと、感染防止に対応しながら対面授業と遠隔授業の混合で、ある程度の学生の期待に応えることができたように思う。動画は繰り返し再生し、動作を分析的に見ることができ、各自の課題に即した学習を進めることができるというメリットがあった。コロナ後もこのような授業方法を活用することにより、学生の内容理解が進むのではないかと考えた。今後も工夫を重ねて取り入れていきたい。「保育内容指導法（健康）」については、遠隔授業に切り替えてから、教科書を用いた実践事例研究を行った。各回で保育のテーマが異なるため、冒頭で学生に解説動画を視聴してもらい、その後、教科書事例を読み、事例研究を行いレポートにするという流れでパターンを作った。自由記述部分の記載を見ると、対面から遠隔への以降がスムーズだったと感じた学生もいれば、何をどのように取り組むのが最初はわかりにくかった、時間が足りなかったといったコメントもあり、受講の状況に個人差があることがわかった。対面授業時では、他の学生の様子も見る機会が多く、確認しながら自分の事例研究を進めることができるが、遠隔授業ではその部分ができないため、不安を抱える学生へのフォローをもっと丁寧にすべきであった。提出課題だけでなく、遠隔授業時の授業ごとの簡単なアンケート実施などにより、個々の状況を把握し、フォローしていきたい。

学科：こども学科 職名：准教授 氏名：副島里美
対象科目：子どもと環境（演習）・特別な教育的ニーズの理解と支援（演習）

【授業についての自己評価と今後の改善・工夫】

授業の工夫・授業の現状

どの授業も視覚的に理解しやすいように、パワーポイントで教科書の内容をわかりやすくまとめ、動画に編集して提示した。授業では、次回の講義場所を伝え、事前学習で読んでくるように伝えているが、その学習が成立しておらず、事前の知識がないために、戸惑いを感じ、授業を把握しきれなかった学生がいたと思われる。

グループ活動に関しては、相当と思われる課題を出し、それをシェアすることで意見の多様性を見出すことを目標にしたが、“自分でやること”が精一杯になることがあった。また、グループでの課題を出したときは、課題をこなす量に学生間の格差が生じてしまい、不満を持つ学生がいた。

今後に向けての改善

- ・なるべく教科書に沿って話を進め、教科書のどこに書かれてあることについて説明しているのかを、明確になるように進行する。
- ・なぜ今この内容をやらねばならないか、という理由を明確に示していくことで、将来につながる感覚が持てるようにする。
- ・学生の質問に対してさらに丁寧な返答を心がける。
- ・学生に出す課題の量を再考し、厳選していく。
- ・課題の提出期限などを更に明確に提示していく。

学生に期待すること

本授業で行っている内容は、どれも実際の現場で実践していくことが望まれる内容である。しかし、実際に現場に入ってしまうと日々の業務に忙殺され自分を省みたり、保育の意義について考える時間は限られてくる。多忙な毎日であると思うが、自分を見つめなおす、保育の根本を考える（書物を読むなど）の機会を是非取っていただきたい。

人（社会）の中には色々な意見がある。今は同じような価値観を持った集団にいるためにあまり感じないと思うが、社会の中では自分の意に反して動くことも多い。そしてそれが日常である。多くの意見を受け止めることができる寛容な心を持ってほしい。また、学生自身が多くの知識を“主体的”に臨んでいく態度で、受講してほしいと願います。

学科・専攻：こども学科 職名：准教授 氏名：藤田雅也

対象科目：「保育内容指導法」（演習）、「保育内容の理解と方法Ⅱ（造形）」（演習）、
「保育実習指導Ⅱ」（講義）

I. 授業の目標・工夫

それぞれの授業の目標は以下の通りである。いずれの授業においても実践と理論の往還を通して、子供の成長や発達についての理解を深め、適切な指導と援助ができる、感性豊かな人材の育成を目指している。

○「保育内容指導法（表現）」

保育の内容としての5領域を関連させ、総合的に保育を展開するための表現領域の知識、技術、判断力、指導力を修得し、子ども理解に基づいた保育としての表現について学ぶ。

○「保育内容の理解と方法Ⅱ（造形）」

様々な素材や用具を活用した表現技法を体験的に学ぶ演習を通して子どもの造形活動を追体験し、指導を行う上での基礎となる造形能力を高める。

○「保育実習指導Ⅱ」

さまざまな記録のとり方・まとめ方を学び、実習記録の記載能力を高めることができる。実習テーマ設定の意義を学び、保育実習Ⅰの学びを踏まえたテーマを設定することができる。部分実習や責任（一日）実習を実践するために、指導案作成能力を高めることができる。

II. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

○「保育内容指導法（表現）」

「自分はこの授業を受けてこの分野に対する興味関心が増した」「教員は学生が主体的に学びに取り組めるよう工夫をしていた」「教員は学生に対して誠実に対応していた」「教員に授業に対する熱意が感じられた」等の項目については、当科目平均点高い数値結果であった。

自由記述には、「より実践的な学びができてよかった」「オペレッタはできませんでしたが、表現活動が違う形でできてうれしかった」「多くの手遊びを覚えることができた」など、授業を受けた上での肯定的な意見があった。一方で、「もう少し、先生から教えていただけることが多い」という要望もあった。次年度の授業で、改善していけるように努めていきたい。

○「保育内容の理解と方法Ⅱ（造形）」

「この授業を意欲的な態度で受講した」「教員に授業に対する熱意が感じられた」「安全についての指導や配慮が十分になされていた」「授業内容は良く理解できた」「この授業を受けてこの分野に対する興味関心が増した」「教員は学生が主体的に学びに取り組めるように工夫をしていた」等の項目については、当科目平均点高い数値結果であった。

自由記述には、「対面でできた時はとても楽しく、みんなの作品を見たり先生との交流があったりして、保育学生であることを実感しながら学ぶことができた」「グループワークがあり楽しく取り組むことができた」「上手い下手ではなくいいところを褒めてくださったため、造形への苦手意識が少なくなった」「造形の楽しさを知ることができた」など、授業を受けた上での肯定的な意見があった。

一方で、「リモートよりも対面でやるべき授業だったと思った」という要望もあった。コロナ感染状況にもよるが、次年度の授業では、対面での授業を中心に進めていけるようにしたい。

○「保育実習指導Ⅱ」

「自分はこの授業を意欲的な態度で受講した」「この授業の内容はよく理解できた」「自分はこの授業を受けてこの分野に対する興味関心が増した」「教員に授業に対する熱意が感じられた」「新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった」等の項目については、当科目平均点高い数値結果であった。

自由記述には、「実習についての理解が深まった」「先生方が実習などについて詳しく理解しやすいように話して下さったり、安心するような言葉がけをして下さったりして、とても心強かった」など、授業を受けた上での肯定的な意見があった。一方で、「先生によって動画の長さや課題の重さに差があったので、どの先生が担当されるときも同じくらいの内容だともっと受講しやすかった」という要望もあった。次年度の授業で、改善していけるように努めていきたい。

学科・専攻：こども学科 職名：准教授 氏名：松浦崇

対象科目：社会的養護Ⅱ（演習）、子ども家庭福祉（講義）、

人間関係と援助技術（講義：オムニバス）

I 授業の目標・工夫など

2020年度後期の担当科目は、すべて「遠隔授業」にて行いました。基本的に、YouTubeに授業の説明動画をアップすると共に、授業のレジュメ（PDF）、参考資料をユニバに挙げ、課題に解答する形としました。

「社会的養護Ⅱ」は、児童福祉施設や里親制度についての概要・実際の理解を深めることを目標としています。多くの方が幼い頃に通った保育所や幼稚園と異なり、施設や里親には馴染みがないことが多く、具体的イメージがもてない、理解ができない、興味もてない、という思いを抱えることが多くあります。そのため、これまでの授業では、DVDなどの映像資料や、実際の里親の方の体験談を聞く機会を設けるなどして、イメージを膨らませることを心がけましたが、遠隔授業になったため、YouTubeなどで公式にアップされている動画などを紹介することで代替しました。

また、「子ども家庭福祉」に関しては、最近のニュースや事件などを多く取り上げ、法制度を学ぶことの重要性や、社会の動向と制度の関連がより伝わるよう工夫しました。

「人間関係と援助技術」については、遠隔授業でしたが、全学共通科目という特色を生かし、他学科の学生と交流できる内容を取り入れました。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

遠隔授業ということで、学生の反応を感じる事が難しく、苦労したのですが、全体として、学科・専攻の平均点並みの評価をいただくことができました。

「遠隔授業の方法」については、比較的高い評価になっていました。自由記述でも、「動画時間も丁度良く、内容も分かりやすかった」「該当分野に関する理解や関心が深まった」「動画配信だけでなく、資料も充実していた」「主体的に取り組める課題だった」など、好意的な評価を多くいただくことができました。突然の遠隔授業に、慣れないながらも工夫した点に対して評価をいただけたことに、安心しました。

一方で、「あなた（学生）自身の取り組みについて」の部分や、授業における、学生の主体的な学びを促すための工夫については、低めの評価となりました。この点については、遠隔授業だから、というだけでなく、私自身の反省点として、今後の授業づくりに活かしていきたいと考えています。

III まとめ（学生の皆さんに対して）

遠隔授業では、概論系の科目における基礎的な知識の習得、特に私の授業内容で多い法制度の説明などに関しては、工夫によって、効率的に学ぶことができるように思いました。

ただし、演習科目における演習の取り組み、特に、学生同士の交流や意見交換による相互的な学びについては、難しい部分も多く、私自身、十分な対応を行うことができなかったと反省しています。

学科・専攻：こども学科 職名：講師 氏名：山本学

対象科目：保育内容の理解と方法Ⅰ、Ⅱ（音楽）（演習）、子どもの表現A（講義）、音楽通論（講義）、保育内容指導法（表現）

授業評価アンケートの集計結果、自由記述に対するコメント

[保育内容の理解と方法Ⅰ、Ⅱ（音楽）（山本学、カタヴァ美樹、田代千早、原川葉子、丸尾真紀子、八木名菜子、山田美穂子、鷺巣貴乃、鈴木慶子）]

Ⅰではピアノ奏法の基礎と子どもの歌の歌唱を45分間ずつ、Ⅱでは応用ピアノ伴奏法、特に子ども対象の想定で実践的な内容を45分学習し、選択音楽として45分、声楽、ギター、管打楽器、音楽療法、リトミックのいずれかを学習する。授業はレポーターカードを採用し、独自の工夫を行っている。

1は本アンケートを実施していない。2においては平均を上回っていた。今回は特に、遠隔授業の項目が設けられているが、全面的に対面で行っている。自由記述では、特に2が実践的な内容であったことや、自分から意欲的に授業に参加できたと書かれていた。

[音楽通論]

音楽史、楽典、曲の知識などを複合的、有機的に講義している。例えば、サン＝サーンス「動物の謝肉祭」のような標題音楽の標題を伏せて曲を聞き、作曲家と同じ視点に立って考えてみるなど、学生自身が音楽の深淵を少しでも垣間見ることができるよう工夫を行っている。初めて学ぶことが多く楽しかったなどの記述が多く、ありがたく思っている。

評価はⅠ、Ⅱ、Ⅲ全ての項目で平均を上回っていた。自由記述においては、これまでで一番コメントが多く、遠隔であったからこそ学生のコメントを多く得られ、授業内容をそれに沿った（つまり、質問やより知りたいといったコメントをその後の授業のテーマにするなど）対応をしたことの記述が多かった。

改善点は、YouTubeを使ったからこそそのリンク切れの対応がうまくできなかったことの記述のみであった。

[子どもの表現A]

本授業は、音楽の楽典知識、小学校音楽科との関連などを学習する。前期科目のためアンケートは実施されていない。

[保育内容指導法（表現）]

例年通り手遊びが実践で役に立つのでよかったという記述と、今年はオリジナルシアターを実施したのでそれに対する記述が多かった。評価は3項目で全て平均を上回った。質問をする機会が項目のなかで低かったため今後はこの対応をしていきたいと思う。

学科・専攻：こども学科 職名：助教 氏名：名倉一美

対象科目：幼児理解（講義）、保育内容指導法（人間関係）（演習）

幼児理解（講義）は、第1回目と第13回目を対面授業とし、その他は動画配信にて行った。昨年度まで、この講義は、さまざまな保育実践事例を読み、学生同士がお互いの異なる価値観や視点に触れられるようグループワークでの話し合いを重視してきた。しかし今回はそうした方法が取れなかったため、提出された課題を次の動画配信の中で紹介し、他の学生の意見を知ることによって話し合いの代わりとした。アンケートでは、他の学生の意見を聴けたことがよかったとコメントがあったので、こうした方法が効果的であったと思われる。また13回目の対面授業では、グループでの意見交換を行った。課題のコメントから、たった1回でも話し合いを実施したことで、その価値を十分に体験できたことがわかった。

本講義では、保育における「記録」の重要性を取り上げるため、課題は記録を書く練習につながるようなものを設定した。特に、実習では手書きで記録を書く学生がほとんどであるため、敢えて手書きにて課題提出をするようにした。アンケートでは、遠隔授業が多く手書きの機会が少ない状況の中、この課題が手書きで文字を書く練習になったとコメントが複数あり、学生にとってもプラスになったようである。今後も続けていきたい。

反省点として、事例に対する学生の考察への教員のコメントの質を高める必要がある。その講義で伝える必要がある理論的背景についてはしっかりおさえておき、それらと関連付けながら、学生自身の理解が深まるようなコメントができるよう努力していきたい。

保育内容指導法（人間関係）（演習）は、すべて動画配信にて実施した。1講義につき1テーマを設け、講義ごとにワーク課題を設定して、ユニパから提出する形とした。手探りで動画作成をしたため、内容については当然ながら、時間配分や話し方など、実際に目の前に学生がいないこともあり、これで本当に伝わっているのか、常に不安があった。授業アンケートのコメントでは特に改善点の要望がなかったため、おおよそ学生の理解につながる動画であったことがわかり、安心した。

この授業は、今までグループワークを中心に行ってきたが、今回はそれができないため、前回の課題で提出された学生の内容を整理してまとめ、次の回の動画で紹介することで多様な意見を知る機会とした。アンケートでは、他の学生の意見がわかってよかったとコメントがあったので、グループワークの代用ができたと思われる。また、参考資料動画を用意し、それを視聴してから考える機会を複数設けた。こうした資料が参考になったとコメントがあったので、今後も授業で活用できる資料を集めて提供していきたい。

反省点としては、動画視聴型の授業であったため、学生から質問をしやすい状況でなかったことがあげられる。メールでいつでも質問を受け付けていたが、実際には質問は特になかった。対面ではない状況を鑑みて、より質問をしやすい工夫が必要であったと思われる。

非常勤講師 氏名：石井拓男
対象科目：歯科衛生行政学（講義）

歯科衛生士は法律を遵守して歯科衛生士の業務を行う職種です。そのため、我が国の法制度を学習し修得しなければなりません。

法律制度といえますと、大変難しい文字が並んでいて、何を言っているのか分からないという印象を持たれることが多いと思います。また、法律文は古めかしいカビの生えた文言とされていることもあるようです。

この科目を学習するためには、学んだことを確認するよりどころが大切になります。私は最も有力な学習手段は教科書を読み記憶することと確信しています。何か必要があった時、教科書のあのあたりに書いてあったという記憶が残っていると、事象・事実の確認ができます。また新たな発見ができます。

教科書は読んでおくように、という指示があってもなかなか実行しにくいようです。

私の授業は教科書そのものをスライドで示し、重要文言の提示とそこへのアンダーラインを引くことを指示します。またその文言の解説や関連することを教科書に私が書き込み、それを書き写すことを受講者に指示します。このことは、歯科衛生士の国家試験のための勉強を行う時、それから免許を得て歯科臨床の場に出て歯科衛生士業務の法的なことに疑問を持った時、有力なよりどころとなります。

歯科衛生士は多くの制度の中で業務を行います。個々の法律の細部の理解が必要なこともあります。各々の法制度がどのように位置づけられているのかという全体的な体系も認識する必要もあります。教科書は目次を見ると分かるように、この全体の様子を章や項を作って整理してあります。大変便利な機能を持っています。

法律文は古めかしいカビの生えた文言と前に書きました。しかし、法律はダイナミックに変化しています。時代に追われ、あるいは時代を先取りしてどんどん変わっています。法制度を変えるために国会があります。

歯科衛生士となつてからしばらくして教科書を見た時に、これは古いな、と感じたらそれだけ世の中が変わった証拠となります。その変化を敏感に感じ取るためにも、この科目で現在の法制度を修得していただきたいと思います。

非常勤講師 岡村由紀子

対象科目：乳児保育Ⅱ

I、どの学生も熱心に意欲的に取り組む姿が多くみられました。

II、今年度、密になることが難しい為、授業の論議がなく、講義が一方的になり易い状況でした。そこで

①毎回授業後に振り返り記入する「授業カード」は、授業の「一人ひとりの学び」がよく分かり、進め方を考える機会になりました。

② 授業が一方的にならない様、授業カードに書かれた疑問、質問などをプリントにして、クラス全体の問題として次回の授業に生かし、授業の充実に繋げることをしました。

III、「密の関係の中で発達する乳児時代」その密を避けることが命を守ると言う厳しい時代に直面しています。そんな時だからこそ「専門性」に磨きをかけて『子どもの発達保障が出来る』保育の学びを続けていってほしいと願っています。

IV、総合評価から、保育と言う仕事への興味・関心と共に、深く考える力を持つ保育者養成を願って「実践を科学する」視点で、分かりやすく授業を行っていますが今年も、ねらいが一定に達せられていることが分かり、現場でこれらの力を発揮し、質の高い保育を創る保育者になることを期待しています。

非常勤講師 氏名：川口充
対象科目： 歯科薬理学（講義）

本科目は、後期8回の授業である。その内、6回は対面、終盤2回はリモートで行われた。COVID-19 感染防止策のためマスク、フェイスシールド着用など拘束された条件での授業では、思った以上に話す側の呼吸に負荷がかかり、講義に多少支障があったように感じている。

1) 授業アンケートの集計結果：(1) 授業のあり方：シラバスの提示では、9割以上の学生が到達目標と授業内容が明確であったと感じている。しかし「難易度」は6割の学生が理解し、3割の学生が不十分だった。学生の基礎知識量の差に起因している。専門用語や慣用語句の不慣れ、生物・物理・化学の知識不足により、理解不足を招いた可能性は否めない。

「授業展開の計画性」「授業量・範囲」はほぼ9割が肯定的であったが評価5、4、3の範囲にばらついたことは、内容の一部を次回に重複させたことがあったために学生の印象に格差を生じたと考える。しかし、繰り返しによる知識の定着効果のためには良い策と考えている。

(2) 教え方：「教師の態度（熱意、工夫、対応）」、「誠意ある対応」は評価が高かった。「授業量と進度、理解度に対する配慮」は肯定と否定に大きく分れた。「難易度」に相応する結果である。

「新たに考え、学べる内容」の評価が高く否定意見が皆無だった。ほとんどの学生が内容の新鮮さ、専門性の高さを感じた。総合的に見て本科目の難解さが強調された結果であるが、理解力の差が大きく反映されている。8回の講義で不足分を完全に補うのは困難であるが、積極的な質問を促すなど授業の工夫が求められる。

(3) 学生の授業に対する積極性：「出席への意識」、「理解する努力」、「意欲的な授業参加」は評価が高い。理解につながる「疑問への質問」「予習復習」は低値を示した。この改善が授業の質の向上に大きく繋がると思われる。学生の努力が求められる。

2) 自由コメントに対するコメント：確認テストによる理解度の確認、スライドを反映した資料、必要に応じて行われた黒板による補足説明、臨床歯科薬理学の新鮮さ、資料の有用性などの肯定的感想が13件あった。一方で、13件の改善を求める意見の中で、前期の授業との重複に関するものが3件あった。これは総論における重要なポイントについて繰り返し教授することの重要性について理解を望む。

他の多数意見は、進行が早い、理解しづらいなど教え方に対する改善を求めるものであった。「ため息が多かった」は、マスクによる呼吸負荷が原因で、ため息ではなく息継ぎであったことを弁明しておきたい。

- 3) 授業の工夫：**1) 毎回知識の整理のためにポストテストを行う。
2) 授業の進行とシラバスが合うように調整する。
3) 時間外の質問はメールを用い、簡単なものは返信し、複雑なものは次回の講義に回答を用意する。
4) 不慣れな言葉、表現、術語は、資料プリントを作成する。

4) 学生への要望：薬物の知識は患者だけでなく、自身の生活に役立つ。薬理学の知識は自身と周囲の人々、患者に対する薬物の選択使用について正しい判断力を身につけることができる。医療に貢献するための最大の武器といえる。授業でより深い理解を求めるためには予習復習による自身の努力は必須のものである。そして身の薬に関心をもって生活されることを望む。

非常勤講師 氏名：久保幸恵
対象科目：社会調査の基礎（講義）

慣れないオンデマンド授業であったけれども、思った以上の高評価を得られて非常に嬉しいです。昨年度までと比べて、「自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した」という項目が低かったので、課題を提出してもらった際に、「疑問点などあれば、どんどん書いてください」などと注意書きをすべきだったかな、と反省しております。もしオンデマンド授業が続くようであれば、今後の課題だと思います。

オンデマンドで授業をするにあたって、良くなかったことと良かったことの両方を述べておきます。

良くなかったこととしては、ユニパの細かい使用方法が私も学生さんもわからず、トラブルが発生したことがありました。そのトラブルをめぐってメールだけでやり取りをするのは難しかったものの、なんとか問題を解決することができて、ホッとしました。それがユニパを利用してのオンデマンド授業における難しかった点です。

良かった点は、対面授業では全員の作業をみることができませんが、オンデマンド授業では一人一人の作業にフィードバックをすることができたことです。

アンケートでもその点に関しては高い評価があり、良かったと思います。WordやExcelを使ってみることができて良かった、レジュメが分かりやすかった等の高評価もあり、率直に嬉しく思います。

非常勤講師 繁原幸子
対象科目 『地域文化論』

2020年度後期の15回の授業を全て無事に対面講義で終了することができた。前期は他校ではあるが、遠隔講義で学生と一度も会うことなく終了した。遠隔講義のメリットもデメリットも知ったが、後期では周りの状態をみつつ、様々コロナ対策をとりつつ対面を選択した。常に教室、さらに通学時の学生の感染を気にしつつの15回であったが、直接聞いたところ概ね学生には対面であったことは好評であった。しかし来年度は状況次第では遠隔もやむなしということになるかもしれない。コロナ禍での教育の難しさを痛感している。

地域文化論は方言や歴史や習俗、生業と様々な切り口で論じることができるが、ここでは毎回民俗学的手法で地域の文化を論じている。民俗学という学問は広範囲のことを研究する学問であるので、民俗学で読み解くという方法は説明しやすい。しかし民俗学的手法での授業はどうしても戦前の日本の習慣や信仰、風習などを中心として日本という国の文化を探ることになるので、わかりやすく話し、より身近な近年の地域例と行事などの説明が必要で、毎回苦心している。この科目は内容に興味を持てる学生と全く興味を持ってない学生がいるようで、コメントシートの中書かれている内容を見ただけで、かなりの差を感じることもある。

興味を持てる学生は両親や祖父母の話をよく聞いている学生で、自分の家ではこんな年中行事を行っているとか、自分や父親がいかに地域の祭礼にのめり込んでいるかなどのお話を細かく書いてくる学生もいる。また小中学校で教えられていて、自分の住んでいる地域のことについて、実に詳しい学生もいる。そうした学生は授業が良く理解できるが、地域によるのか教えられていない学生もいて、こうした学生に対しては様々な資料提示が必要になる。さらに年中行事の事例では中国からまた行事によっては朝鮮半島経由で日本に入ったものの日本独自の変化をして、今日こんな形態であるという話をするのだが、年中行事を行ったことのない学生もいる。

正月の項目でも、年末の掃除もせず、元旦からトーストで普通の朝を迎えるという学生がいる。初めは驚いたが、聞けば毎年そんな学生がいるので、それ以来、世間では年末から正月にかけてどんなことをしているのか等ということから説明している。その上でなぜそんなことをするのかという意味を説明している。

何にしても、こちらが常識と思って省くと理解できない学生が出てくることは毎回のことである。毎年思うのは、老人施設や子供の施設や様々な場に出て、宇宙人かと思われる職員にならないように地域の行事や習慣の基礎知識を覚えて卒業してもらいたいということである。そのために、来年度もパワーポイントを多用し、身近な事例で分かりやすく根気強く授業を展開させていきたいと思う。

非常勤講師 氏名：深江久代

対象科目：発達と老化Ⅱ（社会福祉学科介護福祉専攻 講義）、医療福祉システム論（学科共通科目 講義）

I 授業の目標・工夫など

各科目の授業目的は以下のとおりである。発達と老化Ⅱ：（１）成長・発達の観点から老化を理解し、老化に関する心理や身体機能の変化及びその特徴に関する基礎的な知識を修得する。（２）高齢者に多い疾病や老化に伴う機能低下が及ぼす日常生活への影響などを理解し、生活支援技術の根拠となる知識を修得する。医療福祉システム論：社会の高齢化が進展する中で、地域における保健・医療・福祉活動の実際や連携のあり方、地域ケアのシステム化などについて学ぶ。

今年度はWebでの講義となった。学生の顔が見えないため、時に顔を出すことを求めたが、従ってくれない学生が多く、どこまで理解しているかの把握が難しかった。学生が理解できるということに心がけて、学生が関心を持てるように身近な新聞の切り抜きや、家族の体験談、視覚的に学べる動画の活用などを取り入れて展開した。また、グループで疾患や症状、留意点について調べ、発表する機会を設け、さらに学生の発表をふまえて要点をまとめるなどの工夫をした。また、ほとんど毎回パワーポイントを使ったため、時には、重要事項、キーワードなどを記入できるような資料を作成し、講義を聞くだけでなく、記入することで、理解できるような工夫を行った。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「発達と老化Ⅱ」についての授業に対する学生の授業アンケート集計結果は、「学生の取り組み」：4.06～4.62、「授業について」：4.25～4.50、「遠隔授業方法」：4.25～4.38であった。学科・専攻平均点と比較するとやや低かったが、授業についての中で「新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった」の点が4.50と良い点であった。自由記載の「この授業で良かったと思うこと」には、「資料だけでは分かりにくい所では、映像を出すなど適切に動画を使用していたところが非常に良いと思った。」「介護だけでなく、様々な職種や地域とどのように連携しているかを学ぶことができた。」「新たに学ぶことが多く、これから高齢者と関わる仕事につく私にとって、とても勉強になった。」などがあつた。「この授業で改善が必要だと思うこと」には、「授業日の告知が遅かった時があつた。」と「プリントが見にくかつた。」という記載があつたため、今後は改善したい。また、学生の理解度や反応の確認のため、約束事として、グループワークの時だけでも顔を出すことを伝えたい。前半では毎回授業終了後にユニパでリアクションペーパーとして、講義の意見・感想・質問の提出を求めたが、毎週であると提出が負担になっている様子であったため、後半はまとめて提出を求めた。リアクションペーパーの記載から学生の理解度や誤った理解の確認ができるため、今後も活用していきたい。

「医療福祉システム論」については、最近の医療・福祉の動向を踏まえ、地域包括ケアシステムや多職種連携、診療報酬制度について強化した内容を教授した。リアクションペーパーの授業の感想から、多職種連携や診療報酬について考える機会となっていると認識している。質問の記述もあることから、今後も関心をもって受講できるよう、より工夫していきたい。

非常勤講師 氏名：前原ひとみ

対象科目：日本経済論（講義）

1. 授業の目標・工夫など

本科目では、経済の基礎的な知識を身に着け、日本経済についての現状や課題を理解し、自分の意見を持てるようになることを目標としていた。講義の前半では、経済学を身近に感じてもらうための導入として、日常生活における経済活動や時事問題、経済学の歴史を取り扱った。講義の後半では、主に戦後から現代までの日本経済の歴史を取り扱い、歴史の移り変わりや、現状の日本経済の課題について検討した。

授業の工夫としては、毎回配布する穴埋め形式のレジュメとパワーポイント資料をもとに授業を行った。レジュメとパワーポイントに従って授業を進めながら、レジュメの空欄に入る語句を毎回の課題として提出させることで授業内容を確認した。今年度は、遠隔授業ということもあり、板書形式での授業が行えなかったため、パワーポイントを作成し、なるべく写真やイラスト等で学生に理解しやすい授業作りを心掛けた。また、授業の補足資料として、統計データや、新聞、漫画資料、イラスト付き解説書、映像資料などを適宜使用しながら、より授業内容の理解を深められるように努めた。さらに、全体を通して3回の小テストを行い、その都度学生に復習を行うように働きかけた。

授業評価アンケートの自由記述欄では、「プリントが見やすかった」という意見もあったが、「資料の量が多い」という意見もあったため、今後は、より厳選して捕捉資料を用いるようにしていきたい。

2. 授業についての自己評価と今後の改善など

授業評価アンケートでは、「Ⅰ. あなた自身の取り組み」、「Ⅱ. 授業について」、「Ⅲ. 遠隔授業の方法について」はどれも学科・専攻平均点を上回る結果となり、大変励みとなった。

昨年度は、レジュメと板書形式で授業を行っていたが、今年度は、遠隔授業に伴ってパワーポイント資料を新たに作成したことで、学生により深い内容理解を促すことができたのではないと思う。今後も、パワーポイント資料をレジュメと合わせて使用していきたい。

しかし、今年度は、遠隔授業ということもあり、例年よりも映像資料が使用できないという授業展開の困難さもあった。使用できなかった映像資料の部分は、パワーポイント資料や他の資料などでも対応していたため、今後もより視覚的にも分かりやすい授業となるように工夫していきたい。

また、学生の意見として、フィードバックをもう少ししてもらいたいという意見もあり、学生が授業に興味関心を示してくれていたため、今後の授業では、学生の意見についてもできるだけ多くの意見にコメントしていけるようにしていきたい。

今後も学生に対して、これからの日本経済について関心を持ち、自分の意見を持てるような講義ができるようより一層尽力していきたい。

非常勤講師 氏名：宮下友美恵

対象科目：保育内容の理解と方法Ⅱ(言葉)(演習)

・新型コロナウイルス感染対策を行いながら、対面授業を行った。当初予定していた幼稚園でのフィールドワークはコロナの関係で1回しか実施できなかったが、カルタづくりや人形劇等、積極的に演習に取り組むことができたと思う。学生の理解度への配慮、理解が深まるような授業方法の工夫、学生が主体的に学ぶための工夫等の項目が高い評価であったので、今後もその点は大切にしたい。